

絵のない絵本

BILLEDBOG UDEN BILLEDER

絵のない絵本

青空文庫

絵のない絵本

ふしぎなことですよ！ わたしは、なにかに深く心を動かされて
いるときには、まるで両手と舌とが、わたしのからだにしばりつ
けられているような気持になるのです。そしてそういうときには、
心の中にいきいきと感じていることでも、それをそのまま絵にか
くこともできなければ、言い表わすこともできないのです。しか
し、それでもわたしは絵かきです。わたしの眼めが、わたし自身に
そう言い聞かせています。それに、わたしのスケッチや絵を見て
くれた人たちは、みんながみんな、そう認めてくれているのです。

わたしは貧しい若者で、たいへんせまい小路こうじの一つに住んでいます。といつても、光がさしてこないというようなことはありません。なにしろ、まわりの屋根ごしに、ずっと遠くの方まで見たすことができるほど、高いところに住んでいるのですから。この町にきた、さいしよのころは、ひどくせまくるしい気がして、さびしい思いをしたものです。それもそのはず、森やみどりの丘おかのかわりに、地平線に見えるものといえは、ただ灰色の煙えんとつ突ばかりなのですからね。おまけに、ここには、友だちひとりいるわけではありませんし、あいさつの声をかけてくれるような顔なじみもなかったのです。

ある晩のこと、わたしはたいへん悲しい気持で、窓のそばに立

つていました。ふと、わたしは窓をあけて、外をながめました。ああ、そのとき、わたしは、どんなに喜んだかしれません！そこには、わたしのよく知っている顔が、まるい、なつかしい顔が、遠い故郷からの、いちばん親しい友だちの顔が、見えたのです。それは月でした。なつかしい、むかしのままの月だったので。あの故郷の、沼地ぬまちのそばはに生えている、ヤナギの木のあいだから、わたしを見おろしたときと、すこしもかわらない月だったので。わたしは、自分の手にキスをして、月にむかって投げてやりました。すると、月はまっすぐわたしの部屋の中にさしこんできて、これから外に出かけるときには、まい晩、ちよつとわたしのところをのぞきこもうと、約束やくそくしてくれました。そのときからとい

うもの、月は、ちゃんとこの約束を守ってくれています。ただ残念なのは、月がわたしのところに、ほんのわずかの間しかいられない、ということですよ。でも、くるたびごとに、その前の晩か、その晩に見たことを、あれこれと話してくれるのでした。

「さあ、わたしの話すことを、絵におかきなさい」と、月は、はじめたずねてきた晩に、言いました。「そうすれば、きつと、とてもきれいな絵本ができますよ」

そこでわたしは、いく晩もいく晩も、言われたとおりにやってみました。わたしは、わたしなりに、新しい「千一夜物語」を絵であらわすことができるかもしれませぬ。でも、それでは、あまりに数が多すぎます。わたしがここに書きしるすものは、勝手に

選びだしたものでなくて、わたしが聞いたとおりの順序にならべたものなのです。すぐれた才能にめぐまれた画家なり、詩人なり、音楽家なりが、もしもこれをやってみようという気があれば、もつとりっぱなものにすることができにちがいありません。わたしがお見せするものは、ごく大ざっぱに紙の上に書きつけた、ほんの輪郭りんかくにすぎません。そしてそのあいだには、わたし自身の考えもまじっているのです。というわけは、月はかならず、まい晩きてくれたわけではありませんし、ときには一つ二つの雲が、わたしと月のあいだにはいりこんでくることもあったからです。

第一夜

「ゆうべ」これは、月が話したとおりの言葉です。「わたしは、インドの澄すみきつた空気の中をすべって、ガンジス河にわたしの姿をうつしていました。わたしの光は、古いプラタナスの葉が、ちようどカメの甲こうのように盛りあがって、茂しげっている生垣いけがきの中に、さしこもうとしていました。

するとそのとき、茂みの中から、カモシカのように身軽で、イブのように美しい、ひとりのインド娘むすめが出てきました。このインド娘は、なにかしら空気のように軽かろやかでしたが、それでいて、

ぴちぴちとした、ゆたかなからだつきをしていました。わたしは、この娘のきやしやな皮膚ひふをとおして、考えていることを読みとることができました。とげのあるつる草が、娘の履物はきものを引きさきました。そんなことにはかまわずに、娘はいそいで先へ進んでいきました。そのとき、野獸やしゅうがのどのかわきをうるおして、河から帰ってきましたが、娘を見るとびっくりして、そばをとびすぎていきました。むりもありません。この娘は、火のもえている明りを手に持っていたのです。娘はほのおが消えないように、そのまわりに手をかざしていましたから、わたしはかぼそい指の中の、いきいきとした赤い血を見ることができました。

娘は河に近よって、明りを流れの上におきました。すると、明

りは流れにつれて、くだつていきました。ほのおは、いまにも消えそうにちらちらしました。それでも、もえつづけていきました。娘の黒い、きらきらかがやく眼めは、長い絹糸のふさのような、まつ毛の奥おくから、魂たましいのこもつた眼つきをして、そのほのおのあとを、じつと見おくつていました。娘は、その明りが、自分の眼に見えるかぎりのあいだ、もえつづけていけば、愛する人はまだ生きている、けれども、もしも消えてしまえば、もうこの世にはいないのだということを、知っていたのです。見れば、明りは、もえながらふるえました。娘の心も、もえあがつて、ふるえました。娘は膝ひざまずいて、祈いのりました。すぐそばの草の中に、ぬらぬらしたへびがいました。けれども娘は、梵天王ぼんてんおうと自分の花婿はなむこのこと

しか考えていませんでした。

『あの人は生きています！』と、娘は喜びの声をあげました。すると、山々からこだまが返ってきました。

『あの人は生きています！』

第二夜

「きのうのことですよ」と、月がわたしに話しました。「わたしは、家にかこまれている、小さな中庭をのぞいていました。見ると、めんどりが一羽^{いちわ}、十一羽のひなどりたちといっしよに寝^ねていました。ところが、そのまわりを、ひとりのきれいな女の子が、はねまわっているのです。めんどりはびっくりして、コツコツコと鳴きながら、羽をひろげて、小さなひなどりたちをかばいました。そこへ女の子の父親が出てきて、女の子をしっかりとつけました。わたしはそれきり、もうそのことは考えずに、先へすべっていき

ました。

ところが今夜、それもほんの二、三分前のことですが、わたしは、またおなじ中庭を見おろしていたのです。はじめのうちは、ひっそりとしていましたが、まもなく、あの小さな女の子が出てきて、そつと、とり小屋にしるのびよりしました。そして、かんぬきをはずして、めんどりとひなどりたちのいるところへ、しるのびこみました。にわとりたちは大声でさげびながら、羽をばたばた打って、飛びまわりました。けれども、女の子は、そのあとを追いかけるのです。わたしは壁かべの穴からのぞいていたので、このありさまが、手に取るようにはつきりと見えませんでした。わたしは、このいけない子に、すっかり腹をたててしまいました。ですから、父

親が出てきて、きのうよりもっとひどくしかりつけて、女の子の腕うでをつかんだときには、ほんとにうれしくなりました。女の子は、頭をうしろへそらせました。すると、青い眼めに大粒おおつぶの涙なみだが光っていました。

『おまえは、ここで何をしているんだ？』と、父親がたずねました。すると、女の子は泣きだしました。

『あたしはね』と、女の子は言いました。『この中へはいつて、めんどりにキスをしてやって、きのうのおわびをしようと思つたの。だけど、おとうさんには、どうしても、そのことが言えなかつたのよ！』

それを聞くと、父親は、このむじやきな、かわいい子のひたい

にキスをしてやりました。わたしも、その眼と口にキスをしてやりました」

第三夜

「このすぐ近く、せまい小路こうじで——そこはとてもせまいので、わたしは家の壁かべにそつて、ほんの一分間しか光をすべらせることができません。でもその一分間に、そこに動いている世間を知るのに十分なものを見るのですが——わたしは、ひとりの女を見ました。十六年前には、この女はまだ子供でした。そして、田舎いなかの古い牧師の家の庭で遊んでいたのです。バラの生垣いけがきは古くなつて、もう花ざかりをすぎていましたが、道の外まで生おいしげつて、長い枝えだをリンゴの木立こだちの中までのばしていました。まだあち

こちに咲さきのこつている花もありましたが、花の女王にふさわしいほど美しくはありませんでした。それでも、色もありましたし、香かおりもありました。しかしわたしには、牧師の小さな娘むすめのほうが、ずっと美しいバラの花のように思われました。その娘は、のびにのびた生垣こしの下の、足台に腰かけて、厚紙でこしらえた人形の、へこんだ頬ほおにキスをしていました。

それから十年たって、わたしは、その娘をもう一度見ました。こんどは、はなやかな舞踏室ぶとうしつにいるのを見たのです。そのときは、ある金持の商人の、美しい花嫁はなよめになつていたのでした。わたしは娘の幸福をよろこんで、静かな夜ごとに、たずねてやりました。ああ、それにしても、だれひとりとして、わたしの明るい

眼めと、わたしのたしかな眼差まなざししとを、考えてくれる者はありません！ わたしのバラの花も、牧師の家の庭のバラの花とおなじように、ずんずん若枝をのばしていききました。

日常の生活にも、悲劇があります。今夜、わたしは、その最後の一幕ひとまくを見たのです。そのせまい小路で、その女は死やまいの病やまいにとりつかれて、寝しん台だいの上に横よこになっていました。ところが、その女の主人は、ただひとりいこくの保護者であるはずなのに、乱暴で、冷れ酷こくな悪人だったものですから、その女のふとんをひきはがして、こう言いました。

『起きろ！ おまえの顔を見りや、だれだつていやんなつちまわあ！ さあ、おめかしでもしろ！ 金をかせぐんだ！ さもなき

や、表へおっぽりだすぞ！ 早いとこ、起きた、起きた！』

『死神しにがみが、わたしの胸の中にいるんです！』と、その女は言いました。『ああ、どうか休ませてください！』

それでも、男は女をひきずり起して、顔におけしようにをし、髪かみにバラの花をさして、窓ぎわにすわらせました。それから、火のもえている明りを、すぐそばへおいて、出ていきました。わたしは、女をじっと見つめていました。女は身動きもしないで、すわっていました。と、手が膝ひざの上に落ちました。風のために窓がはねかえって、窓ガラスが一枚、ガシャンと割れました。けれども、女はじつとすわっていました。カーテンが女のまわりを、ほのおのようにはためきました。女は、もう死んでいたのです。あけは

なたれた窓から、死んだ女が、人間のありかたをといっていました。
牧師の家の庭の、わたしのバラの花が！」

第四夜

「わたしは、今夜、ドイツ喜劇を見てきました」と、月が言い
ました。「それは、ある小さな町でのことでした。馬小屋が芝居小
屋になっていました。つまり、馬をつなぐ仕切りはそのまま残し
てあつて、これをかざりたてて、見物の棧敷さじきにしてあつたのです。
そして木造のところは、どこもかしこも色とりどりの色紙で張り
めぐらしてありました。ひくい天てんじよう井からは、小さな鉄のシヤ
ンデリアがさがつていました。そしてその上には、桶おけが一つさか
さにはめこまれていて、まるで大きな劇場のように、プロンプタ

ーのベルが『リーン、リーン』と鳴りひびくのを合図に、その桶の中にシャンデリアが引き上げられるようになっていました。

『リーン、リーン』小さな鉄のシャンデリアが、三、四十センチばかり跳ねあがりました。こうして、喜劇が始まることになったのです。

旅行中の、ある若い公こうしやく爵しやくが、奥方おくがたといつしよに、ちようどこの町を通りかかって、きようの芝居を見物にきていました。

そのため、小屋は人でいっぱいでしたが、ただシャンデリアの下だけは小さな噴火口ふんかこうのようになっていました。そこには、ろうが『ポタリ、ポタリ』と落ちるので、だれもすわる人がなかったのです。わたしは、なにもかもながめました。というわけは、小

屋の中がひどくむし暑かったので、壁かべの小窓という小窓を、あけはなしておかずにはいられなかったからです。そしてどの小窓の外からも、若い男や女が中をのぞきこんでいました。もつとも、中には警官がいて棒でおどしてはいましたが。

オーケストラのすぐそばに、若い公爵夫妻が、二つの古い肘ひじか掛けいすに腰こしかけているのが見えました。いつもなら、この席には町長夫妻がすわることになっていたのですが、今夜ばかりは、ほかの町の人たちとおなじように、木のベンチに腰かけなければなりませんでした。

『まあどうでしょう。タカがタカに追われたというものですわね！』と、奥さんたちが小声で話しあっていました。なにもかみが、

このために、いつそうお祭らしくなっていました。シヤンデリア
がおどりあがりました。のぞいている連中は、指をぶたれました。
そうしてわたしは——そうです、この月のわたしは、ぜんたいの
喜劇をいっしょに見たのです——

第五夜

「きのう」と、月が言いました。「わたしはそうぞうしいパリを見おろしていました。わたしの眼めは、ルーブル宮きゆうでん殿の中のうちこちの部屋の中へ入りこんでいきました。みすばらしい身なりをした、ひとりの年とつたお婆ばあさんが——このお婆さんは貧しい階級の人でした——身分のいやしい番人の後について、がらんとした大きな玉座ぎよくざの間にはいつてきました。お婆さんはこの広間を見たかったです。見ないではいられなかったのです。お婆さんがこの部屋までくるのには、なんどもなんども、ちよつとした

贈り物おくものをしたり、言葉をつくして頼みたのこんだりしたのでした。

お婆さんはやせこけた手を合せて、まるで教会の中にもいるように、うやうやしくあたりを見まわしました。

『ここだったんだ!』と、お婆さんは言いました。『ここだ!』
こう言つて、金の縁ふちかざ飾りのついている、立派なビロードの垂れさがつた玉座に近づいて行きました。

『そこだ、そこだ!』とお婆さんは言いました。そして膝ひざをついて、まっかなじゆうたんにキスをしました。——お婆さんは泣いていたと思います。

『これはそのビロードじゃなかつたんだよ』と、番人は言いました。そう言う番人の口もとは、微笑びしょうがただよいました。

『でも、ここでしたよ!』と、お婆さんは言いました。『こんなふうだったんですもの!』

『こんなだったかもしれないが』と、番人は答えました。『そうじゃないね。窓はたたきこわされ、戸はひっぱがされて、床の上には血が流れていたのさ! ——だがね、あんたは、わたしの孫はフランス国の玉座の上で死んだと、言おうと思えば言えるんだよ!』

『死んだ!』とお婆さんはくりかえしました。——それから、
ひとこと
一言も話さなかつたような気がします。ふたりは、まもなくその広間を出て行きました。夕暮の薄明りが消え失せました。

そのためわたしの光は、二倍に明るくなって、フランス国の玉座

のまわりの立派なビロードの上を照らしました。きみは、そのお婆さんはだれだったと思いますか？――

わたしはきみに一つの物語をしてあげましょう。それは七月革命のときのこと、あの世にも輝かがやかしい勝利の日の夕暮だったので。一軒いっけん一軒の家が城じょうさい砦いとなり、一つ一つの窓が堡ほうらい壘いとなっていました。民衆はチュイルリー宮へ向つて突進とっしんしました。女や子供たちまでも、戦う人々の中にまじっていました。人々は宮殿の部屋や広間の中に押し入おって行きました。ぼろを着た貧しい小さな男の子がひとり、年上の人たちのあいだで勇敢ゆうかんに戦っていました。しかしそのうちに、あちこちを銃じゅうけん剣けんでつかれて致命傷ちめいしょうを受け、とうとう床の上に倒たおれました。それは玉座の間

での出来事でした。人々は血まみれの男の子をフランス国の玉座の上に横たえて、傷のまわりにビロードを巻きつけました。血潮は王のまっかなじゆうたんの上に流れました。そのありさまはまったく一つの絵でした！ 華麗かれいな広間、戦っている人々の群れ！

ひきさ引裂かれた旗は床の上に落ちていました。三色旗は銃剣きよの先にはためいていました。そして玉座の上には、青ざめて聖らかな顔をきよをした貧しい男の子が、眼を天へ向けて横たわっていました。手足は死との戦いのために、もうぐったりとしていました。あらわな胸、みすばらしい着物、そしてその上を半ばおおっている、銀のユリの花のついた、立派なビロードのひだ。この子がまだゆりかごの中にいたころ、そのそばで『この子はフランス国の玉座の

上で死ぬだろう！』という予言がなされていたのです。母親の心は、新しいナポレオンを夢みていたのです。

わたしの光は、その子のお墓の上の不滅むぎわらぎく花の花輪にキスをしたものです。そして今夜は、年とつたお婆さんのひたいにキスをしました。そのときお婆さんは、きみが絵にすることのできる『フランス国の玉座の上の貧しい男の子』の絵を、夢にみていました」

第六夜

「わたしはウプサラにいました」と、月が言いました。「わたしは作物の育たない畑と、わずかしか草の生えていない大きな平野を見おろしました。わたしはフュリス河に自分の姿を映しました。ちようどそのとき、蒸気船にびつくりした魚が、葦のあいだに逃げこみました。わたしの下の方を雲が走っていました。長い影をオーデインの墓、トールの墓、フレイヤの墓と人々が呼んでいる小高い丘の上に投げていきました。これらの丘の上をおおっている薄い芝生の中には、人々の名前が切りこまれていました。こ

こには旅行者たちが自分の名前を刻きざみつけることのできるような記念石もなければ、どこかに自分の姿をえがかせることのできるような岩壁がんぺきもありません。ですから、ここを訪おとずれる人々は芝生を刈かりとらせました。はだの見える地面が、大きな文字や名前となつて現あわれていきます。そしてそういう文字や名前が、大きな丘の上に張あられた一つの網あみのようになっています。いわば一種の不滅ふめつです。もつとも、それをまた新しい芝生がおおつていくのですが。

そこに、ひとりの男が立たっていました。歌い手でした。男はひろい銀の輪のついた蜜酒みつしゆのさかずきを飲みほして、一つの名前をつぶやきました。そして風に向むつて、その名前をだれにももら

さないようにと頼たのみました。ところが、わたしは聞いてしまったのです。わたしはその名前を知っていました。その名前の上には、伯はくしやく爵かくの冠かんむりがきらめいています。だからこの男は、その名前を大声で言わなかったのです。わたしはほほえみました。この男の上には、詩人の冠がきらめいているではありませんか！ エレオノーラ・デステの高貴さはタツソーの名前と結びついています。それからまたわたしは知っています、どこに美のバラが咲さくかということを——！」

月がこう言ったとき、一いっぺん片の雲が通りすぎました。——詩人とバラのあいだには、どんな雲も割りこまないでいてもらいたいものです。

第七夜

「波打ちぎわにそつて、カシワの木とブナの木の森がひろがつて
います。そこはいかにもすがすがしい森で、よい香りかおがただよつ
ています。春になると、幾いくひやく百ひゃくともしれないナイチンゲールが
訪おとずれてきます。この森のすぐ近くに海があります。永遠に姿を変
えている海です。そしてこの森と海とのあいだを、広い国道が通
つています。馬車がつぎからつぎへと走つています。けれどもわ
たしは、その後については行きません。わたしの眼めは、たいてい
一つの点にとまるのです。そこには一つの大きな塚つかがあります。

キイチゴの蔓つるとリンボクが、石の間からのびています。ここに、自然の中の詩があるのです。きみは、人々がこれをどんなふうにかかっているとと思いますか？ そうだ、わたしがそこで、きのうの夕方から夜にかけて聞いたことだけを話してあげましょう。

最初に金持の農夫がふたり、馬車に乗ってやってきました。

『そこらにあるのは、たいした木じゃないか！』と、ひとりが言いました。

『一本あたり、十じゅうだ駄のまきはとれるよ！』と、もうひとりが答えました。

『この冬もきびしい寒さになるぜ。去年は一坪つぼ十四ターレルで売ったっけな！』

こう言つて、ふたりは通りすぎて行きました。

『ここは道が悪いなあ！』と、べつの馬車で来た人が言いました。
『そりやあ、あのいまましい木のためさ！』と、つれの者が答えました。

『なにしろここは、海のほうからしか風が吹いてこないんだからね！』

こう言いながら、このふたりも通りすぎて行きました。駅馬車も通りかかりました。こんなにすばらしい景色のところへ来ても、みんな眠つていました。御者はラツパを吹きならしました。そして心の中では、『おれの吹き方はうまいもんだ。それによ、こへ来ると、ほんとうにいい音がでる。だが、みんなはどう思つ

ているかな?』と、こんなことばかりを考えていました。こうして、駅馬車も行つてしまいました。

こんどは、ふたりの若者が馬をとばせてやつてきました。この血の中には青春とシャンパン酒があるな、とわたしは思いました。このふたりも、口もとに微笑びしょうをうかべながら、苔こけのむした丘おかと薄暗うすい茂みしげのほうをながめました。

『水車屋のクリスチーネといっしょに、ここを散歩したいなあ!』と、ひとりが言いました。

それから、ふたりは駆け去りました。あたりの花は、たいへん強においしました。そよ風は静かにまどろみました。海はまるで、深い谷の上にひろがっている空の一部になったかのようでした。

また一台の馬車が通りすぎました。中には六人の客が乗っていました。そのうち四人は眠っていました。五人目の男は、自分によく似合うはずの、新しい夏服のことを考えていました。六人目の男は、御者のほうへからだを乗りだして、あそこに積み重ねてある石には、なにか特別のことでもあるのかとたずねました。

『いいや』と、御者は言いました。『ただ、石が積み重ねてあるだけでさあ。だが、あっちの木のほうとなると、特別のことがありますて！』

『どうしてだい？』

『ええ、特別のことがありますとも！ 旦那、冬になって、雪が

深くつもりますってえと、何もかも一面に平らになってしまいま

さ。そんなとき、あつしの目印になるのが、あの木でしてね、あいつを頼たよりにして行くからこそ、海にもはまりこまねえですむつてもんでき。だからね、あいつは特別なんですよ!』——こう言つて、走り去りました。

そこへ、ひとりの画家がやってきました。その眼はきらめきました。一ひとこと言も物を言いませんでした。画家は口くちぶえ笛を吹きました。ナイチンゲールが歌いはじめました。一いちわ羽また一羽と、だんだん高く。

『だまれ!』と、画家はどなつて、すべての色と濃のうたん淡とを非常にくわしくかきとめました。『青、薄うすむらさき紫、濃のうかつしよく褐色!』これはすばらしい絵になるでしょう! 画家は、鏡がものの姿をう

つすように、それをうつしとったのです。そしてそうしながら、ロツシーニの行進曲を口笛で吹いていました。

最後にやってきたのは貧しい女の子でした。女の子は塚のそばで休んで、荷物をおろしました。美しい青白い顔を森のほうへ向けて、そこからひびいてくる物音に耳をかたむけました。海のかたの大空を見上げたとき、女の子の眼はきらきらと輝かがやきました。両手が合されました。『主いのの祈り』をとなえたように思われます。この子は自分でも、自分自身の中を流れている感情がわかりませんでした。しかし、わたしは知っています。長い年月がたつうちには、この瞬しゅんかん間とまわりの自然とが、画家がきまつた絵具でえがきだしたよりもずっと美しく、さらにいつそう忠実に、この

子の思い出のうちにときおり生きかえってくるだろうということ
を。わたしの光は、あかつき暁の光が女の子のひたいにキスをするまで、
この子の後について行きました！」

第八夜

重い雲が空一面にたれこめて、月はまったく姿を現わしませんでした。わたしは二重のさびしい思いにかられながら、わたしの小部屋の中に立って、いつも月が輝き出てくるあたりの空をながめていました。わたしの思いは広くかけめぐりました。そして、毎晩あんなに美しい話を聞かせてくれたり、すばらしい絵を見せてくれたりした、偉大な友だちのことに思い及びました。

そうです、いままでにこの月の体験しなかったことがあるでしょうか！ ノアの^{だいこうずい}大洪水のときにも、その水の上を帆走^{ほばし}つたの

です。そして、ちようどいまわたしにほほえみかけているのと同じように、箱船はこぶねの上にほほえみかけて、やがて花咲き出ようとする新しい世界の慰めなぐさをもたらししたのです。イスラエルの人民が泣きぬれてバビロンの河辺かわべに立ったとき、あの月は豎琴たてごこのかかっているヤナギの木のあいだから、悲しげにそれをのぞいたことでもあるのです。ロメオが露台ろだいの上によじのぼって、まことの愛の接吻せつぶんが天使の思いのように天へのぼって行ったとき、まるい月は黒い糸杉いとすぎのあいだに半ばかくれて、澄みすきつた空に浮うかんでいたこともあります。また、セント・ヘレナの島に幽閉ゆうへいされた英雄えいゆうが、荒寥こうりょうたる岩頭に立って、胸に雄志いまだを抱きながら大海原おおうなばらをながめやっている姿を見たこともあるのです。

そうですね、月にとって話せないようなことが何かあるでしょうか！ この世界の生活は、月にとっては一つのおとぎばなしなのです。なつかしい友よ、今夜わたしはきみの姿を見ません。きみの訪問の記念に、どんな絵をもかくことができせん。——こうしてわたしが、^{むそ}夢想にふけりながら雲の中を見上げますと、そこが明るくなりました。それは一すじの月の光でした。けれども、その光はすぐまた消えてしまいました。黒い雲がすべてで行ったのです。しかし、それこそ^{あいさつ}挨拶でした。月がわたしに送ってくれた、やさしい晩の挨拶だったのです。

第九夜

空気はまた澄みわたりました。幾晩か、たっていました。月は上弦じょうげんになっていました。わたしはふたたびスケッチをしようという考えを起しました。——月の話してくれたことをお聞きください。

「わたしはグリーンランドの東海岸まで、北極鳥と、泳いでいるクジラの後を追って行きました。氷と雲とにおおわれた裸はだかの岩山が谷をとりまいていました。ヤナギとコケモモが咲きそろう、よい香りのするセンオウは甘い匂においをひろげていました。わたしの

光は弱く、わたしのまるい顔も、茎くきからもぎとられて何週間も水の上をただよっているスイレンの葉のように、青ざめていました。北極光の冠かんむりが、もえさかっていました。その光の輪は広くて、光の線は渦うず巻く火柱のように大空ぜんたいにひろがって、緑と紅くれないとにきらめいていました。

この地方に住んでいる人たちが踊おどりと娯楽ごらくのために集まっていたのですが、この美しさを見ても、ふだん見なれているために、だれひとり驚おどろく者はありませんでした。この人たちは、『死人たましいの魂たましいは、海象せいうちの頭といっしょに踊らせておけばいい』という、この人たちなりの信仰しんこうに従って考えていたのです。心も、眼めも、歌と踊りにばかり向けられていました。輪になったまん中に、手太てだ

鼓いこを持ったひとりのグリーンランド人が毛皮も着ないで立って、海豹あざらし捕りの歌の音頭おんどをとっていました。すると合唱隊は『エイア、エイア、ア!』とそれに応じました。そうして、白い毛皮を着て、まるい輪をつくって跳はねまわりました。そのありさまは、まるで北極熊ぐまの舞踏会ぶとうかいのようでした。眼と頭が、思いきりはげしく動いていました。

そのうちに、裁判と判決が始まりました。仲なかたが違いがをしている人たちが前に歩みでて、まず恥はずかしめを受けた者が相手の悪いことを即そつきよう興きようの歌にして、大胆だいたんにあざけつて言いたてました。こうしたことはみんな、太鼓に合せて踊っている最さいちゆう中ちゆうに行われるのです。訴うったえられたほうの者も、同じようにずる賢がしこくそれに

答えます。すると、集まっている人たちが笑いさざめきながら、ふたりのあいだに判決をくだすのでした。岩山はとどろき、氷ひょう塊かいかいがくずれ落ちました。落下する大きな塊かたまりが、途とちゆう中でごなごなにくだけ散りました。それはグリーンランドらしい、美しい夏の夜でした。

そこから百歩ばかり離はなれたところに、入口のひらいた、皮のテントがあつて、その中にひとりの病人がねていました。その暖かい血の中にはまだ生命が流れていました。でも、もうこの男は死ななければなりません。自分でもそう思っていましたし、まわりの者もみんなそう思っていたのです。ですから、その男の妻は、後になって死人のからだにさわらないでもいいように、夫

のからだのまわりに皮の衣ころもをしつかりと縫ぬいつけて、たずねました。

『あんたは、あの岩の上の固い雪の中に埋うめてもらいたいのか？

それならわたしは、そこをあんたのカヤックとあんたの矢かざで飾かざつてあげるよ。アンゲゴックがその上を踊おどつてくれるだろうよ。それとも、海の中へ沈しずめてもらいたい？』

『海の中へ』と、男はささやいて、悲しげな微笑びしょうを浮うかべながら、うなずきました。

『あそこは気持ちのいい夏のテントだからね』と、妻は言いました。

『あそこなら海豹あざらしも何千となく跳とびはねているし、足もとには海象せいうちがねむっているんだもの。漁はたしかで、おもしろいにち

がないわ！』

それから、子供たちは泣き悲しみながら、窓に張つてあつた皮を引きちぎりました。こうして瀕死ひんしの病人を海へ、大波のうねつていゝ海へ、連れだそうといふのです。その海こそは、生きていゝるあいだはこの男に食べ物あたを与え、いまは、死んでから後の安息を与えるのです。墓標となるのは、夜となく昼となくたえず変化しながら、ただよつていゝる冰山です。その氷塊の上では海豹がまどろみ、海つばめはその上を飛びこえて行くのです」

第十夜

「わたしはひとりの老嬢オールドミスを知っていました」と、月が言いました。「この人は冬になると、いつも黄色いしゆすの外套がいとうを着ていましたが、それはきまつて新しいものでした。それがこの人にとつての、ただ一つの流行だったのです。夏には、いつも同じ麦わら帽子ぼうしをかぶっていました。そして、同じ青灰色せいかいしよくの着物をきていたような気がします。

この人は通りをへだてた向いにいる、ひとりの年とつた女友だちのところへ出かけて行くだけでした。けれども、その友だちも

死んでしまいましたので、去年はそれさえもしませんでした。わたしの老嬢はいつもひとりぽっちで、窓の中がわで立ち働いていました。そこには夏じゆう美しい花が咲き、冬には毛織帽子の上
にきれいなタガラシがさしてありました。ところが先月は、この人はもう窓ぎわにすわっていませんでした。でも、まだ生きてはいたのです。わたしには、それがよくわかつているのです。というのは、この人があの女友だちとよく話していた大旅行に出かけるのを、わたしはまだ見ていなかったからです。

『そうよ』と、そのとき、この人は言っていました。『わたしはいつか死んだら、一生のうちにしたよりもっと大きな旅行をするのよ。ここから六マイル離れたところ^{はな}に、わたしの家の墓地が

あるわ。そこへわたしは運ばれて行って、親類の人たちといっしょに眠るのよ』

ゆうべ、その家の前に一台の車がとまりました。人々は一つの棺ひつぎを運びだしました。それでわたしは、あの人^{ねむ}が死んだことを知りました。人々は棺のまわりにわらをかけました。それから、車は動きだしました。そこには、去年一度も家から出たことのない老嬢が、静かに眠っていました。

車はまるで楽しい旅にでも出かけるように、すばらしい勢いで町から出て行きました。国道に出ると、いつそう早くなりました。御者ぎよしゃは二、三度そつとうしろを振り向きました。もしかしたらあの人^{ねむ}が、黄色いしゆすの外套を着て、棺の上にすわっていはし

ないかと、心配しているようでした。そのため御者はめちやめちやに馬に鞭むちをあてたり、手綱たづなをぐつと引きしぼったりしました。それで、馬はふうふう泡あわをふきだしていました。馬は若くて元気でした。ウサギが一ぴき、道を横ぎりしました。馬はまっしぐらに走って行きました。もの静かな老嬢は、生きているときは、年から年じゆう家の中の同じ場所だけをゆつくりと動きまわっていたのに、死んだいまとなって、このひろびろとした国道を真一文字に走って行くのでした。

わらのむしろで包んであった棺はこが跳ね上がって、道の上に落ちこちました。ところが、馬と御者と車とは、そんなことにはかまわずに、荒れ狂あらくるったように駆け去かってしまいました。ヒバリが歌

いながら野から舞^まいあがって、棺の上のほうで朝の歌をさええずり
ました。それから、棺の上にとまって、くちばしでむしろをつつ
きました。そのようすは、まるでさなぎを裂^さきやぶろうとでもし
ているようでした。それからヒバリは、ふたたび歌いながら、大
空に舞い上がりました。そしてわたしは赤い朝雲のうしろに引き
さがったのです」

第十一夜

「こんれい婚禮のしゆくえん祝宴がありました」と、月が話しました。「歌がうたわれ、健康を祝ってさかずきがあげられました。すべてが豊かで、はなやかでした。お客たちも帰っていききました。もう真夜中をすぎていました。母親たちは花はなむこ婿と花はなよめ嫁にキスをしました。わたしは、花婿花嫁がふたりだけになったのを見ました。けれども、カーテンがほとんどすっかり引かれていて、ランプがこの楽しい部屋を照らしていました。

『みんな帰ってくれてありがたい！』と、花婿は言って、花嫁の

両手と唇くちびるにキスをしました。花嫁はほほえみ、そして泣きました。蓮はすの花が流れる水の上に休らうように、ふるえながら花婿の胸に頭をもたせて、そしてふたりはやさしい幸福な言葉をささやきあいました。『ぐっすりおやすみ』と、花婿は言いました。花嫁はカーテンをわきへ引きよせました。

『まあ、なんてきれいなお月さまなんでしょう！』と、花嫁が言いました。『ごらんなさいな、あんなに静かで、あんなに明るいわ！』それからランプを消しました。楽しい部屋の中はまっくらになりました。しかしわたしの光は、花婿の眼めが輝かがやいていたように、輝いていました。——女性よ、詩人が生命の神秘をうたうときには、その豎たてごと琴にキスをなさい！」

第十二夜

「わたしはポンペーの一つの光景をきみに話してあげましょう」
と、月が言いました。「わたしは『墓場通り』といわれている郊^こ
外^{うがい}にいました。そこには美しい記念碑^{きねんひ}がいくつか立っています。
そのむかし狂喜^{きょうき}した若者たちが、ひたいにバラの花を巻いて、
美しいライスの姉妹^{しまい}たちと踊^{おど}ったところです。いま、そこは死ん
だように静まりかえっています。ナポリに勤務しているドイツ
兵が警備にあたっていて、トランプやさいころ遊びをやっています。

外国人の一団が警備兵につきそわれて、山の向うから町の中へはいつてきました。この人たちは、わたしの照り輝く光の中で、墓の中からよみがえった都市を見ようと思つたのです。そこでわたしは、広い熔岩ようがんをしきつめた街路にのこつている車輪の跡あとを見せてやりました。それからまた、戸口に書いてある名前や、昔のままにかかつている看板を見せてやったりしました。その人たちは、小さい中庭では貝かざがらで飾られた噴水ふんすい受けの水盤すいばんを見ました。しかし、いまは水も噴き上ふがってはいませんでした。また金属製の犬が戸口の番をしている色あざやかな部屋々々からも、歌声一つひびいてはきませんでした。

それは死の都でした。ただベスビオの山だけは、あいもかわら

ず永遠の讚歌さんかをとどろかしていました。その一つ一つの詩句を、人間は新しい爆発ばくはつと呼んでいるのです。わたしたちはビーナスの神殿しんでんに行きました。それはきらきら光るまっ白な大理石でできていました。広い階段の前に高い祭壇さいだんがあつて、円柱のあいだに生はえているしだれヤナギはいきいきとしていました。空気はすきとおつて碧色あおいろをしていました。背景にはベスビオの山が黒々とそびえていて、そこから噴きでる火は笠松かさまつの幹のように立ちのぼっていました。煙けむりの雲が夜の静けさの中に照らしだされて、笠松のこずえのように、血のように赤くひろがっていました。

この一団の中にひとりの歌姫うたひめがいました。この歌姫はほんとうにすぐれた声楽家で、わたしはヨーロッパの大都會でこの人が

ほめそやされているのを見たことがあります。人々が悲劇の劇場に近づいたとき、みんなは円形劇場の石の段の上にすわりました。こうして数千年前と同じように、ふたたびこの劇場のわずかな場所が人々に占められたのです。舞台はまだ昔のままになっていました。壁を塗った側面と、背景に二つのアーチがあつて、そこから以前の時代と同じ装飾が見えました。つまりそれは自然そのもののことで、ソレントとアマルフィのあいだの山々です。

歌姫はたわむれに古代の舞台上があつて歌いました。この場所が靈感を与えたのです。わたしは思わずも、鼻息あらく、たてがみをなびかせつつ走り去るアラビアの野馬を思いださずにはいられませんでした。歌姫の歌には、ちょうどそれと同じ軽やかさ

と確かさとがありました。またわたしは、ゴルゴタの丘おかの十字じゆうじ架かの下で苦しみ悩なやむ母親のことを思わずにはいられませんでした。ちようどそれと同じ心にしみ入る、深い苦痛が現われていました。そしてあたりには、数千年の昔と同じように、ふたたび拍は手くしゆと歓呼かんこの声がひびきわたりました。

『しあわせな人！ すばらしい才能にめぐまれた人！』と、みんなは歓声をあげました。

三分後には舞台は空からになりました。すべてが去りました。もう物音一つ聞えなくなりました。あの一団は歩み去ったのです。しかし、廢墟はいきよはあいもかわらず立っていました。これからもなお数百年のあいだ、このままに立ちつづけることでしょう。そして

この瞬^{しゅん}間^{かん}の喝^{かつ}采^{さい}のことも、美しい歌姫のことも、その歌声
やほほえみのことも、だれひとり知る者もなく、忘れられ、過ぎ
去ってしまうのです。わたし自身にとつても、この一^い時^{とき}はすで
に消え去った思い出なのです」

第十三夜

「わたしはある編集者の窓をのぞきこみました」と、月が言いました。「そこはドイツのどこかでした。その部屋には、りっぱな家具と、たくさんいくぶんの書物と、乱雑に積みかさねた新聞がありました。若い男がいくぶん人もいました。編集長自身は大きな机のそばに立っていました。二冊の小さい本が、いずれも若い作家の書いたものですが、それが批評されることになっていました。

『この一冊はぼくに送ってよこしたものなんだが』と、編集長は言いました。『ぼくはまだ読んでいない。だが、きれいな装そうてい幀

だね。内容はきみたちどう思う？」

『ええ』と、ひとりが言いました。この人自身詩人でした。『とてもいいですよ。すこし長たらくてだらだらしていますが、まあなんととっても若い人ですからね。詩句にしたって、もうすこし直すこともできるでしょう。思想はたいへん穩健おんけんです。むろん、ごくありふれた考え方ですけども。しかし、どう言うべきでしょう？ 何か新しいものを見つけようたって、いつも見つかるわけじゃないんですから、ほめてやっていいと思います。といったところで、この男が詩人としてりっぱなものになろうなどは、ぼくもけっして思っていないません。ともかく知識もあり、すぐれた東洋学者でもあり、またたいへん穩健な批評をする人なん

です。ぼくの『家庭生活についての随想録』にりっぱな批評を書いたのは、この男なんですよ。若い人に対しては寛大でいてやりたいものです』

『いや、あれはまったくの愚物ですよ』と、この部屋にいたもうひとりの紳士が言いました。『詩では凡庸ということぐらい悪いことはありませんよ。それにあの男ときたら、一步も凡庸以上に出ていないんですからね』

『かわいそうなやつ!』と、第三の男が言いました。『しかもこの男の叔母さんは、この男のことを喜びとしているんです。その叔母さんというのは、編集長さん、あなたのこのあいだの翻訳にあんなに大勢の予約者を集めてくれた人なんですよ——』

『ああ、あの親切な婦人ね！ うん、ぼくはこの本をごく簡単に批評することにしたよ。疑う余地なき才能！ 歓迎すべき天賦

の素質！ 詩の園そのに咲いた一輪の花！ 装幀もいい、などとね。

ところで、もう一つの本はどうだろう！ あの著者は、ぼくにも買わせようという腹らしい。——評判がいいよ。あの男は天才をもっているんだね。きみたち、そう思わないかね？』

『ええ、みんなはそう言いたててますね』と、さっきの詩人が言いました。『だけど、すこし粗雑そざつですよ。コンマの打ち方なんか、あまりにも天才的すぎますね』

『あの男はこきおろしてやって、ちつとは腹をたてさせたほうがためになりますよ。さもなきや、のぼせあがってしまいますから

ね』

『しかし、それは不当です』と、第四の男が大声に言いました。

『そんな小さい欠点ばかりをかぞえたてないで、いいものを喜びましょうよ。しかもここには、それがたくさんあるんです。まったく、あの男は衆をぬきんでていますよ』

『とんでもない！ もしあの男がほんとうの天才だとすれば、そのくらいの鋭い非難すうどにだって耐えるたことができるさ。あの男を個人的にほめる者はいくらでもある。われわれはあの男を慢心まんしんさせないようになしようじゃないか！』

『疑う余地なき才能！』と、編集長は書きました。『だれにもありがちの不注意。この著者もまた不幸な詩句を書くことは、二十

五ページに見いだされる。そこには二つの母音ほいんちようふく重複うんぬんがある。古人についてさらに研究されんことを切望する、二云々』

わたしはそこを立ち去りました」と、月は言いました。「それから、その叔母さんの家の窓をのぞいてみました。そこには評判のいいおとなしい詩人が、招待されたすべての客から賞讃しょうさんされてすわっていました。この人は幸せしあわでした。

わたしはもうひとりの詩人を、粗雑な詩人をさがしました。この人もまた、ひとりの後援者こうえんしやのところ集まった大勢の人々の中にいました。そこでは、もうひとりの詩人の本が話題にのぼっていました。

『わたしはあなたの本も読みましょう』と、後援者が言いました。

『しかし正しやうじき直ちかに言うとは、あなたも知つての通り、わたしは自分の思っていることをなんでも言つてしまふ人間ですが、こんどの本に対してはそんなに期待していませんよ。あなたはあまりに粗雑すぎる！ 空想的すぎる——といつても、あなたが人間としてきわめて尊敬すべき人であることは、わたしも認めています』

ひとりの若い娘むすめが片隅かたすみにすわつて、本を読んでいました。

——天才のほまれはどろにまみるれど、
凡庸のわざは空高くかかげらる！——

『こは古き語り草なれど、
なおつねに新たなり！』

第十四夜

月が話しました。「森の道にそつて、二軒にけんの農家があります。戸口は低く、窓は上と下とについています。あたりにはサンザシやヘビノボラズが生えています。屋根は苔こけでおおわれていて、黄色い花やイワレンゲが咲さいています。小さい庭にはキャベツとばれいしよがあるだけです。生垣いけがきにはニワトコが花をいっばいに咲かせています。

その下に、ひとりの小さい女の子がすわっていました。その子は鳶とびいろ色の眼めで、二軒の家のあいだに立っている古いカシワの木

をじつと見つめていました。この木は枯れた高い幹を持っているのですが、その上の方は鋸のこぎりでひき切られていました。そこにコウノトリが巢すをつくっていました。ちようどいまコウノトリがその上に立って、くちばしをガチャガチャやっていました。

ひとりの小さい男の子が出てきて、女の子のそばに並ならびました。このふたりは兄きょうだい妹まいだったのです。

『何を見てるんだい？』と、男の子はききました。

『コウノトリを見てるのよ』と、女の子が言いました。『おとなりのおばさんがね、コウノトリが今夜あたしたちに小さい弟か妹を連れてきてくれるって言ったの。だからあたし、コウノトリが来るのを見ようと思って、気をつけてるのよ』

『コウノトリなんて、なんにも持ってきやしないさ』と、男の子が言いました。『いいかい、おとなりのおばさんは、ぼくにもおんなじことを言ったけど、そう言ったとき笑ってたんだ。それでぼく、おばさんに、きつとですかつて、きいたのさ。——だけとおばさんは返事ができなかつたんだぜ。だからぼくには、ちゃんとわかっちゃつたんだ。コウノトリの話なんて、ぼくたち子供にほんとうらしく思わせるだけのことさ!』

『だけど、そんなら赤ちゃんはどこから来るの?』と、女の子はたずねました。

『神さまが連れてきてくださるのさ』と、男の子は言いました。

『神さまは外がいとう套の下に入れて連れていらつしやるんだよ。だけ

ども、人間は神さまの姿を見ることができない。だから、神さまが赤ん坊あかぼうを連れていらつしやるのも、ぼくたちには見えないのさ』

その瞬間しゆんかん、ニワトコニワトコの木の枝えだの中でザワザワという音がしました。子供たちは両手を合せて、互たがいに顔を見合せました。たしかに神さまが子供を連れてきたのです。——ふたりは手を取り合いました。家の戸があきました。それはおとなりのおばさんでした。

『さあ、はいつてらつしやい』と、おばさんは言いました。『コウノトリが何を持ってきてくれたかごらんなさい。ちつちやな弟さんよ！』すると、子供たちはうなずきました。ふたりとも、その弟が来たことを、もうちゃんと知っていたのです』

第十五夜

「わたしはリユーネブルクの荒野こうやの上をすべって行きました」と月が言いました。「道ばたに小屋がいっけん一軒、ぽつんと立っていました。葉の散り落ちた藪やぶが二つ三つ、そのすぐそばにありました。そこでは、どこからか迷いこんできたナイチンゲールが歌をうたっていました。けれども、ナイチンゲールは夜の寒さのために死ななければなりません。わたしが聞いたのは、そのナイチンゲールのこの世での最後の歌だったのです。

あかつき 暁の光が輝かがやきました。旅人の一隊がやってきました。それは外

国へ移住して行く農夫の一家でした。船でアメリカへ渡ろうとして、ブレーメンかハンブルクへ行くところだったのです。この人たちはアメリカへ行けば、幸運が、夢みている幸運が、花を開くものと思っていたのでした。女たちは小さい子供を背中に背負っていました。いくらか大きい子供たちはそのそばを跳びはねていました。やせこけた一頭の馬が、わずかばかりの家具をのせた車を引いていました。

つめたい風が吹いてきました。それで小さい女の子は、母親のそばにぐつとからだをすり寄せました。母親は、かけはじめたわたしのまるい月の輪を見上げながら、故郷でなめてきたひどい苦勞のことを思いうかべたり、^{はら}払うことのできなかつた重い税金の

ことを考えたりしていました。それは、この一行のだけれもが考えていることでした。だから赤々と輝く暁の光は、ふたたび訪れてくるであろう幸運の太陽の福音ふくいんのように思われたのです。いまにも死にそうなナイチンゲールの歌声を聞いても、それは悪い予言者ではなく、幸運の告知者のように聞えたのです。風がヒューヒューと鳴っていました。ですから人々には、ナイチンゲールのうたう歌がわかりませんでした。

『安らかに海を渡れ！ 長い船路ふなじのために、おまえは持てるすべてのものを支払った。貧しくよるべなく、おまえはおまえのカーンの地を踏むふだろう。おまえはみずからを売り、妻を売り、子供を売らねばならない。だが、長く苦しむことはない！ 香り高かお

い広い葉かげに、死の女神めがみがすわっている。その歡迎かんげいのキスは、おまえの血の中に死の熱病を吹きこむのだ。ゆけよ、ゆけ、盛りもあがる大波を越こえて！』

旅人の一行は、喜んでナイチンゲールの歌に聞きいりました。

というのは、その歌がやがて来る幸福をうたっているように思われたからです。薄うすくも雲のあいだから日が輝いてきました。農夫た

ちは荒野を横切つて教会へ行きました。黒い着物を着て、頭を厚

い白い麻あさぬの布でつつんだ女たちの姿は、教会の中の古い絵からお

りたつてきたのではないかと思われました。このあたりを取り巻

いているものは、ひろびろとした荒こうりよう寥ようたる環かんきよう境ようばかりで

した。乾ひからびた褐かつしよく色のヒースと、うす黒く焦こげた芝しばくさ草が、

白い砂洲さすのあいだに見えるだけでした。女たちは讚美歌さんびかの本を持つて、教会のほうへ行きました。ああ、祈いのれよ！ 盛りあがる大波のあなたの墓場へさすらい行く人々のために祈れよ！」

第十六夜

「わたしはひとりのプルチネツラを知っています」と、月が言いました。「見物人はこの男の姿を見ると、大声にはやしたてます。この男の動作は一つ一つがこっけいで、小屋じゆうをわあわあと笑わせるのです。けれどもそれは、わざと笑わせようとしているわけではなく、この男の生れつきによるのです。この男は、ほかの男の子たちといっしょに駆^かけまわっていた小さいころから、もうプルチネツラでした。自然がこの男をそういうふうにつくつていたのです。つまり、背中に一つと胸に一つ、こぶをしょわされ

ていたのです。ところが内面的なもの、精神的なものとなると、じつに豊かな天分をあた与えられていました。だれひとり、この男のように深い感情と精神のしなやかなだんりよくせい弾力性を持つている者はありませんでした。

劇場がこの男の理想の世界でした。もしもすらりとした美しい姿をしていたなら、この男はどのようなぶたい舞台に立つても一流の悲劇役者になつていたことでしょう。英雄的なもの、いだい偉大なものが、この男の魂にはみちみちていたのでした。でもそれにもかかわらず、プルチネツラにならなければならなかったのです。苦痛や憂鬱ゆううつさえもがこの男の深刻な顔にこっけいな生真面目きまじめさを加えて、お気に入りの役者に手をたたく大勢の見物人の笑いをひき

起すのです。

美しいコロンビーナはこの男に対してやさしく親切でした。でもアルレッキーノと結婚けっこんしたいと思っていました。もしもこの『美女と野獣やじゆう』とが結婚したとすれば、じっさい、あまりにもこっけいなことになったでしょう。プルチネツラがすっかり不機ふき嫌げんになつているときでも、コロンビーナだけはこの男をほほえませることのできる、いや大笑いをさせることのできるただひとりの人でした。最初のうちはコロンビーナもこの男といっしょに憂鬱しゆううつになつていましたが、やがていくらか落ちつき、最後には冗談だんばかりを言いました。

『あたし、あんたに何が欠けているか知ってるわ』と、コロンビ

「ナは言いました。『それは恋愛れんあいなのよ』

それを聞くと、プルチネツラは笑いださずにはいられませんで
した。

『ぼくと恋愛れんあいだって!』と、この男は叫さけびました。『そいつはさ
ぞかし愉快ゆかいだろうな! 見物人は夢中むちゆうになって騒さわぎたてるだろ
うよ!』

『そうよ、恋愛れんあいよ!』と、コロンビーナはつづけて言いました。
そしてふざけた情熱をこめて、つけ加えました。『あんたが恋こいし
ているのは、このあたしよ!』

そうです、恋愛れんあいと関係のないことがわかっているときには、こ
んなことが言えるものなのです。すると、プルチネツラは笑いこ

ろげて飛び上がりました。こうして憂鬱もふつとんでしまひました。けれども、コロンビーナは眞実のことを言つたのです。プルチネツラはコロンビーナを愛していました。しかも、芸術における崇高すうこうなもの、偉大なものを愛するのと同じように、コロンビーナを高く愛していたのです。コロンビーナの婚礼の日には、プルチネツラはいちばん楽しそうな人物でした。しかし夜になると、プルチネツラは泣きました。もしも見物人がそのゆがんだ顔を見たらば、手をたたいて喜んだことでしょう。

ついこのあいだ、コロンビーナが死にました。葬式そうしきの日には、アルレッキーノは舞台に出なくてもいいことになりました。この男は悲しみに打ち沈しずんだ男やもめなんですから。そこで監督かんとくは、

美しいコロンビーナと陽気なアルレッキーノが出なくても見物人を失望させないように、何かほんとうに愉快なものを上演しなければなりませんでした。そのため、プルチネツラはいつもの二倍もおかしく振舞ふるまわなければならなかったのです。プルチネツラは心に絶望を感じながらも、踊おどつたり跳はねたりしました。そして拍はくしゅかっさい

手喝采を受けました。

『すばらしいぞ！　じつにすばらしい！』

プルチネツラはふたたび呼び出されました。ああ、プルチネツラは、ほんとうに測りしれない価値のある男でした！

ゆうべ芝居しばいが終つてから、この小さな化物ばけものはただひとり町を出て、さびしい墓地のほうへさまよつて行きました。コロンビー

ナの墓の上の花輪は、もうすっかりしおれていました。プルチネツラはそこに腰こしをおろしました。そのありさまは絵になるものでした。手はあごの下にあて、眼めはわたしのほうに向けていました。まるで一つの記念像のようでした。墓の上のプルチネツラ、それはまことに珍めづらしいこっけいなものです。もしも見物人がこのお気に入りの役者を見たならば、きつとさわぎたてたことでしょう。『すブばラらしいぞボプルチネツラ、すブばラらしいぞ、じブつラにすビばッらしいシモ
！』

第十七夜

月が話してくれたことを聞いてください。「わたしは幼年学校の生徒が士官になって、はじめてりっぱな制服を着たのを見たことがありません。舞踏会ぶとうかいの衣裳いしやうをつけた若い娘むすめや、宴会服えんかいふくを着て楽しそうにしている公こうしやく 爵やくの若い花嫁はなよめを見たこともあり、ます。けれどもどんな喜びも、わたしが今夜見たひとりの子供、四つになる小さい女の子の喜びには、とうていくらべることができません。

その子は新しい青色の着物と新しいバラ色の帽子ぼうしをもらって、

いまそのすばらしい晴れ着を着たところでした。みんなが明りを求めて呼んでいました。窓からさしこむ月の光だけでは十分ではないので、もつと明るい光で照らさなければならなかったのです。そこには小さい女の子が人形のように、腕うでを心配そうに着物からはなし、指を一本一本ひろく開いて、かたくなって立っています。ああ、その眼めと顔ぜんたいが、どんなに喜びかがやに輝かがやいていたことでしょう！

『あしたは、その着物をきて、おもてへ行つてもいいのよ』と、母親が言いました。女の子は帽子を見上げたり、着物を見おろしたりしながら、嬉うれしそうにほほえみました。

『お母さん！』と、女の子は言いました。『あたしがこんなすて

きな着物を着ているのを見たら、
犬たちなんて思うかしら！
」

第十八夜

「わたしは」と、月が言いました。「きみにポンペーのことを話してあげたことがあります。あれはいきいきとした都市がたくさん並ならんでいる中で、さらしものにされている都市の死骸しがいです。けれどもわたしは、それよりももっと珍めづらしい、もう一つの都市を知っています。それは都市の死骸ではなくて、都市の幽霊ゆうれいです。

噴水ふんすいが大理石の水盤すいばんの中でぴちやぴちや音をたてているところではどこでも、わたしはその水に浮うかんでいる都市のおとぎばなしを聞いているような気がします。たしかに、噴水の水はそれ

を物語っているにちがいありません。打寄せる岸^{きしべ}の波はそれを歌っているにちがいありません。海のおもてには、しばしば霧^{きり}がたちこめます。それは寡婦^{かふ}のベールです。海の花婿^{はなむこ}は死にました。その城とその都市とは、いまや御陵^{みささぎ}となつています。

きみはこの都市を知っていますか？ その通りには車のころがる音も、馬のひづめの音も聞えたことがあります。そこには魚が泳いでいて、黒いゴンドラが幽霊のように緑の水の上を走って行きます。わたしは」と、月はなおも語りつづけました。「きみにその都市の中でいちばん大きな広場を見せてあげましょう。そうすれば、きみはまるでお伽^{とぎ}の都市に來たのかと思うでしょう。広い敷石^{しきいし}のあいだには草^はが生えています。夜が明けはじめると、

人なれた鳩はとが何千ともなく、離はなれて立っている高い塔とうのまわりを飛びまわります。

きみは三方からアーケードに取りかこまれています。そこには長いキセルをもったトルコ人がじつとすわっています。美しいギリシヤの少年が円柱によりかかつて、昔むかしの威いりよく力を物語る戦勝記念標のはたざお高い旗竿を見上げています。旗は喪章もしようのように垂れさがつています。ひとりの娘むすめがそこで休んでいます。水のはいった重い桶おけを下に置いていました。桶をかついできた棒は肩かたの上ののせたまま、戦勝柱に身をもたせています。

いまきみの眼めの前に見えるのは妖精ようせいの城ではなくて、教会です。金めつきをした円屋根まるやねとそのまわりの金の球が、わたしの光

を受けて、きらきらと輝かがやいています。その上のほうにあるりっぱな青銅の馬は、おとぎばなしの中の青銅の馬のように、旅をしてきました。はじめここへやってきて、それから行ってしまい、そうしてまた戻もどってきたのです。きみには壁かべや窓の色とりどりの美しさが見えますか？ まるで天才が子供の言うなりになって、この珍しい寺院の装そうしよく飾しよくをしたのではないかと思われれます。

きみにはあの円柱の上の翼つばさのある獅子ししが見えますか？ 金はいまもかわらず光あっています、翼はしばらくられています。獅子は死んでいるのです。なぜならば、海の王が死んでいるからです。大きな会堂の中はからっぽです。むかし高価な絵がかかっていたところも、いまでは裸はだかの壁がむきだしになっています。浮浪ふうろうしや者が

アーチの下で眠ねむっています。かつては、この廊下ろうかには身分の高い貴族しか足を踏ふみ入れることができなかったものです。

深い井戸いどからか、それとも溜息ためいきの橋のそばの牢獄ろうごくからか、

一つの溜息が聞えてきます。そのむかしには、色あざやかなゴン

ドラの上でタンバリンの音がひびき、婚約こんやくの指輪が輝かしい総そ

督うとくの船ブーチントロから海の女王アドリアへ投げこまれたので

す。アドリアよ、おまえの身を霧の中につつまみなさい！ 寡婦の

ベールをもって、おまえの胸をおおいなさい！ そしてそれを、

おまえの花婿の御陵の上に、幽霊のような大理石の都ベネチアの

上にかきなさい！」

第十九夜

「わたしはある大きな劇場を見おろしました」と、月が言いました。「その劇場は見物人でいっぱいでした。というのは、新しい俳優はいゆうが初舞台はつふたいをふむことになっていたので、わたしの光は壁かべにある小さな窓の上をすべって行きました。すると、化粧けしやうをした一つの顔がひたいを窓ガラスに押しつけていました。それがその晩の主人公だったので、騎士きしらしいひげが、あごのまわりがちぢれていましたが、その男の眼めには涙なみだがたまっていました。それもそのはず、人々から口笛くちふえでののしられて、舞台を引き下

がつてきたばかりだったのです。もつとも、ののしられても仕方がありません。あわれな男です！ 才能のない者は芸術の世界では辛抱しんぼうされるわけにはいかないのです。

この男は物事を深く感じもしましたし、感かん激げきをもつて芸術を

愛しもしました。けれども、芸術のほうではこの男を愛してくれ

ませんでした。——舞台監かん督とくの鳴らすベルが鳴りひびきました。

——大だい胆たんに勇気凜りん然ぜんと主人公登場、と役割書には書いてあり

ました——この男は、いま自分をあざけり笑った見物人の前に出なければなりませんでした。——

この芝居しばいが終ったとき、わたしはひとりの男がマントにくるま
つて、階段をこつそり降りて行くのを見ました。それはほかなら

ぬ、さんざんにやつつけられたその晩の騎士でした。道具方の男たちは、ひそひそ話しあっていました。わたしはこの罪人つみびとのあとについて、この男の家の部屋までのぼって行きました。

首をつるのは見ぐるしい死に方だ。そうかといって、毒薬はいつも手もとにありはしない。わたしはこの男がその両方のことを考えていたのを知っています。わたしはこの男が青白い顔を鏡にうつしてみても、それから眼を半ば閉じるのを見ました。こうして、死体となってからもきれいに見えるかどうかをためているのでした。人間は非常な不幸におちいっても、極度に見栄みえをはるこがあるものです。この男は死を考えました。自殺を考えました。そして、自分自身のために泣いたように思います。——はげしく

泣きました。人間は思いきり泣きつくしてしまおうと、自殺などはしないものです。

そのときから、まる一年たちました。とある小さな劇場で、はじめな旅まわりの一座が喜劇を上演しました。わたしはふたたびあの見おぼえのある顔を、化粧した頬ほおとちぢれたひげとを見ました。この男はまたわたしを見上げて微笑びしょうしました。——けれども一分とはたたないうちに、口笛でののしられて舞台から追いだされてきたのでした。みすぼらしい劇場で、なさけない見物人のためにののしられてきたのです！

今夜、一台のみすぼらしい葬儀車そうぎしやが町の門から出て行きました。後あとにはひとりの人もついては行きませんでした。それは自殺

者だったのです。口笛で舞台から追いだされた、あの化粧をしたわれわれの主人公だったのです。車を走らせている御者がただひとりそばにいただけで、ほかにはだれもついていませんでした。月のほかにはだれも。墓地の堀の近くの片隅に、自殺者は埋められました。そこには、やがていらくさがはびこることでしょう。墓掘りの男はほかの墓から抜き取ったいばらや雑草を、そこに投げすてることでしょう」

第二十夜

「ローマから、わたしは来ました」と、月が言いました。「あの都のまん中にある七つの丘おかの一つに、皇帝宮こうていききゆうの廢墟はいきよがあります。野生のイチジクが壁かべの裂目さけめから生えでて、広い灰かいり緑よくしよ色の葉くで壁すはだの素肌すはだをおおっています。砂利じやりの積みかさなつたあいだで、ろばが緑の月桂樹げっけいじゆの垣かきの上を歩いて、やせたアザミを喜んで食べています。かつては、ここからローマの鷲わしたちが飛び出して、『来た、見た、勝つた』と言つたものです。それがいまでは、こわれた二つの大理石の円柱のあいだに粘土ねんどでこしらえた

小さなみすぼらしい家を通つて、入口がついているのです。ブドウの蔓つるがかたむいた窓の上に、葬式そうしきの花輪のようにまつわりさがつています。

ひとりの老婆ろうばが小さい孫娘まごむすめといつしよにそこに住んでいて、

いまこの皇帝宮を支配しています。そしてよそから来る人たちに、ここに埋うもれている宝を見せているのです。りっぱな玉座ぎよくざの間まには、ただ裸はだかの壁が残っているだけで、黒い糸杉いとすぎがむかし玉座のあつたところをその長い影かげでさし示しています。土がこわれた床ゆかの上に、うず高くつもっています。いまはこの皇帝宮の娘である小さい少女が、夕べの鐘かねの鳴りひびくころ、よくその低い小さな椅子いすに腰こしかけています。すぐそばにある扉とびらの鍵穴かぎあなを、この

子は露台ろだいと呼んでいます。その穴からのぞくと、ローマの半分を、聖ペテロ寺院の大きな円屋根まるやねまでも見わたすことができます。

今夜も、そこはいつものように静かでした。そして下のほうに、わたしの輝く光かがやをいっぱいを受けて、この小さい少女が出てきました。頭の上には水のはいった古代風の粘土のかめをのせていました。見ればはだしで、短いスカートも、小さいシユミーズそでの袖もきれっていました。わたしはその子の美しいまるい肩かたと、黒い眼めと、まっ黒なつやつやした髪かみの毛にキスをしてやりました。少女は家の前の階段をのぼってきました。階段は急で、石壁のかけらやこわれた円柱頭などでできていました。

五色のトカゲがびっくりして少女の足もとをかけた行きました

が、少女はすこしも驚きませんでした。そして早くも手をのばして、戸の呼びりんを鳴らそうとしました。ウサギの前足が一つ、紐ひもにゆわえつけられてさがっていました。これがいまの皇帝宮の、呼びりんの引手ひきてなのです。

少女はちよつと手をとめました。何を考えたのでしょうか。きつと、あの下らの礼拝堂はいどうにある、金と銀との着物をきた、美しい子供姿のイエスのことでも考えていたのでしょうか。いま礼拝堂では、銀のランプが輝き、小さいお友だちがこの子もよく知っている歌をうたいはじめていました。でも、ほんとうに何を考えていたのか、わたしにはわかりません。

少女はまた動きました。そして、何かにつまずきました。粘土

のかめが頭から落ちて、溝みぞの掘ほれている大理石の敷しき石いしの上で二つにくだけてしまいました。少女はわつと泣きだしました。皇帝宮の美しい娘は、みすぼらしいこわれた粘土のかめのために泣きました。はだしのままそこに立って、泣いていました。もう皇帝宮の呼びりんの引手の紐を引くだけの元気もありませんでした」

第二十一夜

二週間以上も月は出ませんでした。いままたわたしは月を見ました。ゆるやかにのぼって行く雲の上に、月はまるく明るく輝かがやいていました。月がわたしに話してくれたことをお聞きください。

「アフリカのフェザン地方のある町から、わたしは隊商の後に歩いて行きました。砂漠さばくの手前さきにある岩塩平原の一つで、隊商は立ちどまりました。そこは氷の表面のようにきらきら光っていて、わずかのところだけ軽い流りゅう砂しやでおおわれていました。いちばん年上の男は腰帯こしおびに水筒すいとうを下げ、頭のそばにはパン種のはい

らないパンをいれた袋ふくろをもっていました。この男が杖つえで砂の上に正方形をえがいて、その中にコーランの中の言葉を二つ三つ書きました。隊商はみんな、この聖きよめられたところを通って進んで行きました。

太陽の子であるひとりの若い商人が、物思いにふけりながら、荒あらい鼻息をたてている白い馬に乗っていました。この男が太陽の子であることは、その眼めと美しい姿とで、わたしにはすぐわかりました。この男は美しい若い妻のことでも考えていたのでしようか？ 毛皮と高価な肩掛かたかけで飾かざられたラクダが、この男の妻を、美しい花嫁はなよめを乗せて、町の城じょう壁へきのまわりを歩いたのは、たった二日前のことだったのです。太鼓たいこや袋ふくろ、笛ふえが鳴りわたりま

した。女たちは歌いました。そしてラクダのまわりには、喜びの砲ほうせい声せいが鳴りひびきました。花はなむこ婿むこはいちばんたくさん、いちばん強く鉄砲を打ちました。そしていまは——いまその男は、隊商といっしょに砂漠を通つて行くのです。

わたしは幾いくばん晩ばんも隊商の後について行きました。そして、発育の悪いシユロの木にかこまれた泉のほとりで、この人たちが休むのを見ました。人々は倒たおれたラクダの胸むねにナイフを突つきさして、その肉を火であぶりました。わたしの光は燃えている砂を冷やしました。またわたしの光は、大きな砂海の中の死んだ島ともいうべき黒い岩の塊かたまりを人々に見せてやりました。この人たちは、人の通つたことのない道でも敵の種族に出会いませんでした。嵐あらしも

起りませんでした。旅行く人々を死にたやす砂柱も、この隊商の上にはまき起りませんでした。家では、美しい妻が夫や父のために祈いのつていました。

『あの人たちは死んだのでしょうか？』と、わたしの金色の半月にむかつて、美しい妻はたずねました。『あの人たちは死んだのでしょうか？』と、わたしのこうこうと輝く月の輪にむかつてたずねました。

いまはもう、砂漠は隊商の後になりました。今夜は高いシユロの木の下にすわっています。そこでは鶴つるが長い翼つばさをひろげて飛びまわり、ペリカン鳥はミモザの枝えだから人々を見おろしています。生おい茂しげった草くさ藪やぶが、象の重たい足に踏ふみつけられています。黒

人の群れがずっと奥地おくちにある市場から帰ってきます。黒い髪かみの毛のまわりに銅のボタンをつけて、あい色のスカートをはいた女たちが、重い荷をつんだ牡牛おうしを追っています。その荷物の上には、裸はだかの黒い子供が眠ねむっています。ひとりの黒人は買ってきたライオンの子を綱つなで引いています。こうした人たちが隊商に近づいているのです。あの若い商人は身動き一つしないで、黙だまってすわっています。心に思っているのは美しい妻のことです。この黒人の国にいながら、砂漠のかなたの匂におい高い、まっ白な花のことを夢ゆめみているのです。商人は頭をあげます——！」そのとき、一つの雲が月をおおいました。それから、また一つの雲がかかりました。わたしはその晩はもう、それ以上何も聞きませんでした。

第二十二夜

「わたしは小さい女の子が泣いているのを見ました」と、月が言いました。「その子は世の中が意地悪いのを泣いていたのです。この女の子はとても美しいお人形をもらいました。それは、ほんとうにかわいい、きれいなお人形でした。もちろん、この世の中で不幸な目にあうように生れてきたわけではありません。ところが、この小さい女の子の兄さんの、大きい男の子たちがお人形をひったくって、庭の高い木の上ののせると、そのまま逃にげて行ってしまったのです。

小さい女の子はお人形のところまで行くこともできないし、お人形をおろしてやることもできません。それで、泣いていたのです。お人形もたしかにいつしよに泣いていました。両腕りょううでを緑の枝のあいだからのぼして、いかにも悲しそうなようすをしていましたもの。そうだわ、これがママのよくおっしやる世の中の災難えだでもものなんだわ。ああ、かわいそうなお人形！

あたりは、もう薄暗うすぐらくなりはじめました。もうじき夜になってしまいます。お人形は今夜一晩じゆう、おもての木の上に、ひとりぽっちですわっていないなければならないのでしょうか？ いやいや、そんなことは、女の子にとっては思ってみるだけでもたまらないことです。

『あたし、あんたのそばにいてあげるわね』と、女の子は言いました。といつても、そんな勇氣があるわけではありません。早くも、高いとんがり帽子ぼうしをかぶった小さい小人の妖魔ようまが茂みしげの中からのぞいているのが、はつきり見えるような気がするのです。おまけに、向うの暗い道では、ひよろ長の幽霊ゆうれいが踊りおどをおどつていて、それがだんだんこつちへ近づいてくるではありませんか。そして両手をお人形ののっている木のほうへのぼして、笑つたり、指さしたりしているのです。ああ、小さい女の子はこわくてこわくてたまりません。

『でも、なんにも悪いことをしていなければ』と、女の子は考えてみました。『悪ものだって、なんにもすることなんかできやし

ないわ。でもあたし、何か悪いことしたかしら？』そうして、いろいろと思いだしているうちに、

『ああ、そうだっけ』と、女の子は言いました。『あたし、足に赤いきれをつけてた、かわいそうなアヒルを笑ったことがあったわ。あんなおかしなかつこうをして足をひきずるんですもの、あたし笑っちゃったんだわ。だけど、生き物を笑うなんていけないことだわね』こう言いながら、女の子はお人形のほうを見上げました。

『あんた、生き物を笑ったことがある？』と、ききました。すると、お人形は頭を振ふったように見えました」

第二十三夜

「わたしはチロルを見おろしました」と、月は話しました。「わたしは黒々としたもみの木に、くつきりとした長い影を岩の上へ投げかけさせました。わたしは幼おきなご子イエスを肩かたにのせた聖クリストファの画像をながめました。その絵は、このあたりの家々の壁かべに地面から屋根まで届くくらい、大きくかいてありました。聖フロリアンは燃えあがっている家に水をそそいでいました。キリストは血まみれになって、道ばたの十字架じゆうじかにかかっていました。これは新しい時代の人々にとっては古い画像です。でもわたしは、

それらが建てられるのを見てきました。一つ、また一つと、建てられるのを見てきたのです。

山腹の高いところに、ちょうどツバメの巢すのように、尼僧院にそういんが一つぽつんと立っています。ふたりの姉妹しまいが上の塔とうの中に立って、鐘かねを鳴らしていました。ふたりともまだ年若く、そのためふたりの眼めは山々をこえて、はるかかなたの世間のほうへ飛んで行きました。旅行馬車が一台、下の国道を走っていました。馬車の角つぶえ笛が鳴りわたりました。すると、あわれな尼僧たちは同じ思いになみだかられて、眼を下の馬車にじつとそそぎました。若い妹の眼には涙なみだがたまっていました。——やがて、角笛のひびきはだんだん弱くなっていきました。そしてそのたえだえの音を、尼僧院の

鐘がかき消してしまいました。――」

第二十四夜

月が話したことを聞いてください。

「いまからもう何年も前のことです。このコペンハーゲンで、わたしはあるみすぼらしい部屋の中を窓ごしにのぞきこんだことがあります。父親と母親は眠ねむつていましたが、小さい息子むすこはまだ眠つてはいませんでした。そのとき、寝しん台だいのまわりの花模様のついているサラサのカーテンが動いて、そこから子供の顔が外をのぞくのが見えましました。

わたしは最初、その子はボルンホルム製の部屋時計を見ている

んだらうと思いました。その時計は赤や緑でたいへんきれいに塗ぬつてありました。そして上にはカツコウがとまっています、下には重い鉛なまりのおもりが垂れ下がっていました。ぴかぴか光るしんちゅう板の振りふりこがあっちこっちに揺れ動ゆいて、コットン、コットンいっていました。

ところが、その子が見ていたのはこの時計ではありませんでした。そうです、この子が見ていたのは、母親の紡つむぎぐるま車くるまだったのです。それは時計の真下に置いてありました。その紡車こそ、この子が家じゅうで一番好きなものだったのです。でも、それにさわることはできません。なぜって、ちよつとでもさわろうものなら、すぐに指先をぱんとたたかれるのですから。でも、母親が糸

をつむいでいる間じゆう、この子はいつまでもそこにすわって、ぶんぶんいう紡錘つむと、ぐるぐるまわる車とをながめているのです。そしてそれをながめながら、自分だけの思いにふけるのです。ああ、ぼくにもこの紡車つむでつむぐことができたらなあ！

父親も母親も眠っていました。男の子はふたりのほうを見ました。そして紡車をながめました。それからすぐに、かわいらしい素足すあしが一つ寝床ねどこから出てきました。またもう一つが出てきました。こうして小さな脚あしが二本現われました。コトリ！ 男の子は床ゆかの上に立ちました。男の子はもう一度振り向いて、父親と母親が眠っているかどうかをたしかめました。たしかに、ふたりとも眠っています。そこで、小さな短い寝巻のまま、ぬき足さし足こつそ

りと紡車のところへしのびよって、つむぎはじめました。糸は紡うすい錘から飛び、車はすばらしい早さでまわりました。

わたしはその子のブロンドの髪かみの毛と水色の眼めにキスをしてやりました。それはほんとかわいらしい光景でした。そのとき、母親が眼をさしました。カーテンが動いて、母親が外をのぞきました。そして、小人の妖精ようせいか、さもなければ、ほかの小さな精せいれい霊が来ているのではないかと思いました。

『あらまあ!』母親はこう言いながら、こわごわ夫の脇腹わきばらをつきました。父親は眼をあけると、手でこすりこすり、一心に働いている小さい少年のほうをながめました。

『あれはベルテルじゃないか』と、父親は言いました。

それから、わたしの眼はそのみすばらしい部屋を後にして、ベ
つのところへ向いました。なぜなら、わたしはとても広いところ
を見まわしているのですから。その同じ瞬間しゅんかんに、わたしは大
理石の神々が立っているバチカン宮の広間を見ていました。わた
しはラオコーンの群像を照らしました。すると、石が溜息ためいきをす
るように思われました。わたしは美の女神めがみミューズの胸に、そつ
とキスをしました。すると、その胸が高まるような気がしました。
けれども、わたしの光はナイルの群像のところに、あの巨大きよだい
な神のところに、いちばん長くとどまっていました。その巨大な
神はスフィンクスに身をもたせて、まるで移り行く年月のことを
考えてでもいるかのように、物思いにせずんで、夢ゆめみるように横

たわっていました。小さい愛の神のアモールたちは、そのまわりでワニとたわむれていました。豊饒ほうじょうの角の中にはごく小さいアモールがひとり、腕うでを組んですわっていました。そして、おごそかな顔をした大きな河の神を見ていました。このアモールは、あの紡車のそばにいた小さい男の子にそっくりの姿をしていました。顔かたちもおんなじでした。

ここには、小さな大理石の子供がまるで生きているように、かわいらしく立っていました。けれどもその子が大理石の中からとびだして以来、年の車はもう千回以上もまわっているのです。あのみすばらしい部屋の中の男の子が紡車をまわしたと同じ数だけ、もっと大きな年の車もぶんぶんまわったのです。そしてこの世

紀が、このような大理石の神々をつくりだす日まで、さらにさらにまわりつづけていくのです。

いいですね、これはみんな幾年も前のことですよ。ところできのう」と、月は語りつづけました。「わたしはシエラン島の東海岸にある、どこかの入江を見おろしていました。そこには美しい森や、小高い丘や、赤い壁をめぐらした古いお屋敷などがあり、外堀には白鳥が泳いでいます。そして、りんご園のあいだに教会の立っている小さな田舎町があります。

たくさんの小舟が、それぞれいまつをつけて、静かな水のおもてをすべって行きました。しかし、たいまつをつけていたからといって、それはウナギを捕るためではありません。いや、それ

どころか、あたりのようすからしてお祭のようでした！

音楽が鳴りひびき、歌がうたわれました。一そうの小舟のまん中には、今夜みんなが敬意を表わしている人が立っていました。

それは大きなマントにくるまった、背の高い、がっしりした男で、青い眼と長い白い髪の毛を持っていました。わたしはこの人を知っていました。そしてすぐさまわたしは、ナイルの群像やあらゆる大理石の神々のあるバチカン宮のことを思い浮べました。それといっしょに、あの小さなみすぼらしい部屋のことも思いだしました。あの小さいベルテルが短い寝巻のまますわって、糸をつむいでいたのは、たしかグレンネ街だったと思います。時の車はぐるぐるまわりました。新しい神々が、大理石の中から立ちあがっ

たのです。——小舟の中から、ばんざいの声がひびきました。
『ベルテル・トルワルセンばんざい！』——」

第二十五夜

「わたしはきみにフランクフルトの、ある光景を話してあげましょう」と、月が言いました。「わたしはそこで特に一つの建物をながめました。といつても、それはゲートの生れた家でもなく、古い議事堂でもありません。その議事堂の格子窓こうしまどからは、そのむかし皇帝こうていの戴冠式たいかんしきのときにあぶり肉あぶりにくにされて、人々のご馳走ちそうにされた、角のついたままの牡牛おうしの頭蓋骨ずがいこつが、いまもなお突きでているのですが、しかし、わたしがながめていたのはそんなものではなくて、せまいユダヤ人街まちの入口の角かどのところにある、

緑色に塗ぬられた、みすばらしい平民の家だったので。それは口スチャイルドの家でした。

わたしは開いている戸口から中をのぞいてみました。階段のところには、あかあかと明りがついていました。そこには下男たちが重そうな銀の燭しよくだい台だいに火のともっているろうそくを持って、立っていました。そして、轎かごに乗ったまま階段を運ばれてきた、ひとりの年とつた婦人に向つて、ていねいにおじぎをしていました。この家の主人は帽子ぼうしもかぶらず立っていて、この老婦人の手にうやうやしくキスをしました。

老婦人はこの人の母親だったのです。老婦人は息子むすこと召めしつかい使かいたちに親しげにうなずいてみせました。それから、人々は老婦人

を狭いせま暗いこうつじ小路の中の、とある小さな家へ運んで行きました。そこにこの老婦人は住んでいました。そこで子供たちを生んだのです。そしてそこから、子供たちの幸福が花のように咲さきいでたのです。もしもいま、わたしが人からいやしまれているこの小路と小さい家とを見捨てたなら、幸福もまた息子たちを見捨てるだろう、というのが、この老婦人の信念だったのです。——」

月はこれ以上話してくれませんでした。今夜の月の訪おとずれはあまりに短いものでした。しかしわたしは、人からいやしまれているその狭い小路に住む年とつた婦人のことを考えてみました。このひとがたったひとこと言いさえすれば、テームズ河のほとりに光りかがやく家が立つのです。たったひとこと言いさえすれば、ナ

ポリの入江近くに別荘べつそうが立つのです。

『もしもわたしが、息子たちの幸福が咲きいでたこの小さい家を見捨てたなら、幸福も息子たちを見捨てるだろう！』——それはめいしん迷信です。でもそれは、人がこの話を知り、その絵を見るときに、それを理解するためには、「母親」という二つの文字をその下に書いておきさえすればいいといった類たぐいの迷信です。

第二十六夜

「きのうの夜明けのことでした」これは月自身が言った言葉です。
「大きな町の煙突えんとつは、まだどれも煙けむりをはいていませんでした。
それでもわたしが見ていたのは、その煙突だったのです。と、と
つぜん、その煙突の一つから、小さい頭が出てきました。つづい
て上半身が現われて、りょううで両腕を煙突のふちにかけました。
『ばんざい！』それは小さい煙突そうじの小僧こぞうでした。生れては
じめて煙突の中をてっぺんまでのぼってきて、頭を外につき出
たのでした。

『ばんざい！』そうです、そのとおりです。たしかにこれは、狭せまくるるくた苦しい管や小さい燠だんろ炉の中を這はいずりまわるのとは、いささかわけが違ちがっていました。そよ風がすがすがしく吹ふいていました。町じゆうが緑の森のあたりまで見わたせました。ちようど太陽がのぼりました。まるで大きく、太陽は小僧の顔を照らしました。その顔はじつにみごとに煤すすでまっ黒になっていましたが、嬉うれしさにかがやいていました。

『さあ、おいらは、町じゆうのものに見えるんだ！』と、小僧は言いました。『お月さまにだって、おいらが見えるんだ。お日さまにだってよ！ ばんざい！』こう言いながら、小僧はほうきを打うち振ふりました」

第二十七夜

「ゆうべ、わたしは中国のある町を見おろしました」と、月が言いました。「わたしの光は街路をつくっている、長いはだかの土塀^{べい}を照らしました。あちこちに門がありました、どれもしまつていました。なぜかといいますと、中国人は外の世界のことなんか、ちつとも気にとめていないからです。厚いよろい戸が、家の土塀のうしろの窓をおおっていました。ただお寺だけから、弱い光が窓ガラスをとおしてかすかに射^さしていました。

わたしは中をのぞいてみました。すると、色とりどりの華^{はな}やか

さが眼めにうつりました。床ゆかから天てんじょう井いまで、まばゆいほどの色し彩さいと金きんめつきをほどこした絵がかかっています。それはこの下界における仏たちの所業をえがいたものでした。一つ一つの厨ず子しの中には仏像が立っていました。色どりゆたかな幕や垂れ下がった旗のためにほとんど隠かくれていました。そしてどの仏の前にも——それはみんな錫すずでつくつてあります——小さい祭壇さいだんがあつて、そこには聖きよい水と、花と、火のともっているろうそくとがありました。けれどもお寺の中のいちばん高いところには、最高の御みほとけ仏である仏陀ぶつだが聖なる絹ことういの黄衣おういを身にまとい立っていました。

祭壇の足もとに、ひとりの生きた人間の姿が、ひとりの若い僧そ

侶うりよが、すわっていました。この僧侶は祈いのつているようすでしたが、そのお祈りのさいちゆうに何か物思いにしずんでいるようでした。それは、たしかに一つの罪でした。というのは、その頬ほおは熱くほてり、頭は深く深く垂れ下がっていたからです！ あわれなスイ・ホン！

この男は街の長い土塀ゆめのうしろの、どの家の前にもある小さい花壇で働く自分の姿でも夢ゆめみていたものでしょうか。そしてその仕事のほうが、お寺の中であろうそくの番をするよりも、ずっと好きだったのではないのでしょうか。それとも、ご馳走ちそうのたくさん並ならんでいる食卓しょくたくについて、一皿さくらごとに銀の紙で口もとをふきたいものだと望んでいたのでしょうか。それともまた、この男の罪

が非常に大きなもので、もしもそれを口にでもしようものなら、
極樂ごくらくが死の刑けいをもつてこの男を罰ばつしなければならぬといった
ようなものだったのでしようか。あるいはまた、その思いは野やばん
蛮人じんの船とともにその故郷の、はるかにはだたつたイギリスへ
でも飛んで行ったのでしようか。いやいや、この男の思いはそん
なに遠くまで飛びはしませんでした。けれどもそれは、熱い青春
の血だけが産みだすことのできるような罪深いものでした。この
お寺の中の仏陀をはじめ多くの仏像の前では罪深いものだったの
です。

わたしは、この男の思いがどこにあつたかを知っています。こ
の町のはずれの、平たい敷石しきいしをしいた屋根の上に——その欄ら

んかん 干は瀬戸物せとものでできているように見えます——白い大きな風鈴ふうりん
草そうをさした、きれいな花瓶かびんが置いてありましたが、そのそばに
美しいペーが、細いたずらっぽい眼と、ふくよかな唇くちびると、それ
は小さな足をしてすわっています。靴くつのために足はしめつけら
れていましたが、心はもつともつと強くしめつけられているので
した。娘むすめがきやしゃな美しい腕うでを上げますと、しゅすがさらさら
と音をたてました。

娘の前にはガラス鉢ぼちが置いてあつて、金魚が四ひきはいつてい
ました。娘はうるしをぬった、色どり美しい箸はしで、水の中をそつ
とかきまわしていました。何か物思いにせずんでいましたので、
ほんとうに、ほんとうにゆつくりとかきまわしていました。ああ、

金魚はなんて豊かな金色の着物を着ているのだろう、そしてガラ
ス鉢の中でなんてのどかに暮くらしながら、たくさんの餌えをもらって
いるのだろう、でも、もしも自由になれたら、したらどんなに
幸福だろう、と、きつとこんなことを思っていたのでしよう。ほ
んとくに、この美しいペーにはそれがよくわかつていたのです。
ペーの思いは家からさまよいました。そしてお寺へと向いまし
た。けれどもそれは、仏のためではありません。あわれなペー！
あわれなスイ・ホン！ 現世でのふたりの思いは、めぐりあい
ました。しかしわたしの冷たい光は、大天使の剣つるぎのように、この
ふたりのあいだに横たわっていました！——

第二十八夜

「海は凧ないでいました」と、月が言いました。「水は、わたしが帆走ほぼしっていた澄すみきつた空気のように、透すきとおっていました。わたしは海面よりもずっと下に生えている珍めずらしい植物を見ることができました。それらは森の中の巨木きよぼくのように、幾いく尋ひろもある茎くきをわたしのほうへさし上げていました。魚がその頂の上を泳いで行きました。

空高く野の白鳥の群れが飛んでいました。その中の一羽いちわは翼つばさの力がおとろえて、だんだん下へ沈しずんで行きました。その眼めはしだ

いに遠ざかって行く空の旅行隊キャラバンの後を追っていましたが、翼をひろくひろげて、ちようどしゃぼん玉が静かな空気の中を沈んで行くように、沈んで行きました。やがて水面に触ふれました。頭をそらして翼のあいだにつっこむと、おだやかな湖に浮うかぶ白い蓮はすの花のように、静かに横たわっていました。

やがて風が吹ふいてきて、きらきら輝かがやく水のおもてに波をたたせました。すると、水のおもては、まるでエーテルのようにきらめいて、大きな広い波となつてうねりました。そのとき、白鳥が頭を上げました。きらきら光る水が、青い火のように白鳥の胸や背を洗つて飛び散りました。暁あかつきの光が赤い雲を照らしました。白鳥は元氣を取り戻もどして立ち上がると、のぼりくる太陽のほうへ、空

の旅行隊の飛び去った青みがかった岸^{きし}辺^へをめざして飛んで行きま
した。ただひとり胸^あに憧^{こが}れをいだいて飛んで行きました。青い、
ふくれあがる波をこえて、ひとりさびしく飛んで行きました」――

第二十九夜

「きみにスウェーデンの光景をもう一つ話してあげましょう」と、
月が言いました。「薄暗いもみの木の森のあいだ、ロクセン湖
の陰気な岸辺近くに、古いブレタの僧院があります。わたしの
光は壁の格子をとおつて、広い円天井の部屋へすべりこんで
行きました。その部屋では、王たちが大きな石の棺の中でまどろ
んでいるのです。その棺の上の壁には、この世における栄華をあ
らわすもののように、一つの王冠が人目をひいています。けれ
ども、それは木でこしらえてあつて、それに色彩をほどこし、

金めつきをしたものなのです。そしてそれは、壁に打ちこまれた一本の木釘きくぎで、しつかりととめられています。その金めつきをした木は虫に食いあらされています。クモが王冠から棺まで網あみを張りめぐらしています。これは、人間の悲しみと同じように、はない喪章もしようの旗です！ 王たちは、なんて静かにまどろんでいるのでしよう！

わたしはあの人たちのことをはつきりと覚えていきます！ あんなにも力強く、あんなにも決然と喜びや悲しみを語った、口もとにただよう大胆だいたんな微笑びしょうが、いまもお眼めに浮うかんでいきます。蒸気船が魔法まほうのかたつむりのように山々のあいだをぬってきますと、ときおり旅人が会堂へやってきます。そしてこの円天井のお墓の

部屋を訪れて、王たちの名前をたずねます。でもその人の耳には、おとす王たちの名前は忘れられたもの、死んだものとしてひびくのです。その人は虫の食った王冠を見上げてほほえみます。そしてその人が本当に敬けいけん虔な心の持主であれば、そのほほえみの中には哀あいし愁ゆうの色がただよいます。まどろみなさい、死者たちよ！ 月はきみたちのことを覚えています。月は夜、もみの木の王冠のかかっている、きみたちの静かな王国へ、冷やかな光を送ってあげます！——」

第三十夜

「国道のすぐそばに」と、月が話しました。「いっけん軒の旅館があります。そしてその真向いに、大きな馬車小屋があります。小屋の屋根はちようど葺ふいたばかりでした。わたしは桷たるきのあいだと開いている天てん井じ窓ようまどから、そのうす気味悪い小屋の中をのぞいてみました。七面鳥が梁はりの上で眠ねむっていました。鞍くらはからっぽの秣ま桶ぐさおけの中に入れて、休まされていました。

小屋のまん中には、旅行馬車が一台置いてありました。その持主はまだぐつつすりと寝ねこんでいましたが、馬はもう水を飲まされ

ていました。御者ぎよしゃは道のりの半分以上もよく眠ってきたのに、

——それはわたしがいちばんよく知っています——まだ手足をのばしていました。下男部屋への戸は開いていましたが、寢床ねどこはまるでひっくり返されたかと思われるようなありさまでした。ろうそくは床ゆかの上に置いてあつて、燭台しよくだいの中に深く燃え落ちていました。

風が冷たく小屋の中を吹きぬけていました。時刻は真夜中というよりは、もう明け方近いころでした。向うの馬屋の床の上には、旅まわりの音楽師の一家が眠っていました。たぶん、父親と母親は瓶びんの中の燃えつくような雫しずくを夢ゆめにみていたものでしょう。青白い小さな女の子は眼めの中の燃えるような雫を夢にみていました。

豎たてごと琴は頭のそばに置いてあり、犬は足もとに横たわっていました。――」

第三十一夜

「ある小さい田舎町いなかまちでのことでした」と、月が言いました。

「わたしはそれを去年見ました。しかし、まあ、そんなことはどうでもいいのです。ともかく、わたしははつきりと見たのです。

今夜わたしはそのことを新聞で読みましたが、これはそんなにはつきりとはしていませんでした。

宿屋の下の部屋に熊くまつか使いがすわって、夕飯を食べていました。

熊は家の外のまき小屋のうしろにつながれていました。このあわれな熊は、見るからに恐ろしおそそうなようすをしていましたが、ま

だ一度も人に害を加えたことはありませんでした。上の屋根裏部屋では、わたしの明るい光を受けて、三人の小さい子供が遊んでいました。いちばん上の子はせいぜい六つぐらいで、いちばん下の子は二つをこしてはいませんでした。

『ボタン、ボタン』と階段を上ってくるものがありました。いたい、だれでしょう？ 戸がガタンと開きました——それは熊でした。あの大きな、毛むくじやらの熊ではありませんか！ 熊は下の中庭に立っているのがたいくつになったのです。そして、階段を上る道を見つけたのでした。わたしはそれをのこらず見えました！」と、月が言いました。「子供たちはこの大きな毛むくじやらの動物を見るとびっくりぎょうてんして、めいめい隅^{すみ}っこ

へ這はいこみました。けれども、熊は三人ともみんな見つけてしまいました。そうして鼻でくんくん嗅かぎまわりました。でも、べつに悪いことはなんにもしませんでした。

『これはきつと大きい犬だ』子供たちはそう思ったものですから、熊をなでてやりました。熊はごろりと床ゆかの上に横になりました。

いちばん小さい男の子はその上をころげまわって遊びました。その子のちぢれた金きんぱつ髪ぱつの頭は、熊の濃こい黒い毛皮の中にかくれました。こんどは、いちばん大きい子が太鼓たいこを持ちだして、ドンドンたたきました。すると、熊は二本の後あとあし足あしで立ちあがって、踊おどりだしました。それはほんとにおもしろいありさまでした！

子供たちは、めいめい鉄砲てつぱうをかつぎました。熊も一つもらい

ました。そして、それをちやんとかつぎました。これは、子供たちの見つけたすばらしい仲間です！ それからみんなは、『一、二、一、二！』と行進しました。

そのとき、戸に手をかけたものがありました。戸が開きました。それは子供たちの母親でした。その瞬間しゅんかんの母親のようすといつたら、まったく、きみに見せてあげたいものでした。物も言えない驚きおどろ、石灰のような青白い顔、半ば開いた口、じつと見すえた眼め、そうしたようすはほんとにきみに見せてあげたいものでした。ところがいちばん小さい男の子は、心から嬉しうれそうにうなずいてみせました。そして、この子なりの言葉で大声に叫さけびました。『ぼくたち、兵隊ごっこしているだけよ！』

「そこへ熊使いがやってきました」

第三十二夜

寒い風がびゅうびゅう吹ふいていました。雲が飛び去って行きま
した。月はただときおり見えるだけでした。

「静かな大空をとおして、わたしは飛び行く雲を見おろしていま
す」と、月は言いました。「大きな影かげが地上を走って行くのが見
えます。

このあいだ、わたしは牢ろうごく獄の建物を見おろしました。窓をし
めた一台の馬車が、その前でとまりました。ひとりの囚しゅうじん人が
連れだされることになっていたので。わたしの光は格子こうしのはま

っている窓から壁のところまで押し入って行きました。囚人はこの世の別れに、何か二、三行壁にきざみつけました。しかしこの男の書いたのは言葉ではありません。一つのメロデーでした。この場所ですごした最後の夜に、心の底からほとぼしり出た一つのメロデーだったのです。戸が開きました。囚人は外へ連れだされました。そのとき、わたしのまるい月の輪をふりあおぎました。――

雲がわたしたちのあいだを走りました。まるで、わたしがこの男の顔を見てはならないように、そしてまた、この男がわたしの顔を見てはならないとでもいうかのようでした。男は馬車に乗りました。馬車の戸がしめられました。むちがヒューツと鳴りました。

た。馬はこんもりとした森の中へ駆かけこんで行きました。そこでは、わたしの光は後を追って行くことができません。けれども、わたしは牢獄の格子の中をのぞいてみました。わたしの光は、あの男の最後の別れである、壁にきざまれたメロデーの上をすべつて行きました。言葉の力の及およばないところでは、音の調べがものを言うものです。――

しかし、ただきれぎれの音譜おんぷしか、わたしの光は照らすことができませんでした。その大部分は、わたしにとってはいつまでも暗くら闇やみの中に残されることでしょう。あの男の書いたのは死の讚さ歌んかだったのでしょうか？ 喜びの歓声だったのでしょうか？ あの男は死のもとへ行ったのでしょうか、それとも、愛人に抱だかれ

るために行ったのでしょうか？ 月の光は人間が書くものをさえ、ことごとく読んでいるわけではありません。

ひろびろとした大空をとおして、わたしは飛び行く雲を見おろしています。大きな影が地上を走って行くのが見えます！」

第三十三夜

「わたしは子供が大好きです」と、月が言いました。「小さい子は、ことにおもしろいものです。子供たちがわたしのことなんかちつとも考えていないときにも、わたしはカーテンや窓わくのあいだから、たびたび部屋の中をのぞいています。子供たちがひとりで、やつとこ着物をぬごうとしているのを見るのはとっても愉快かいです。最初に、裸はだかの小さいまるい肩かたが着物の中から出てきて、そのつぎに腕うでがするつと抜けぬてできます。それから、靴くつした下したを脱ぬぐところも見ます。白くて固い、かわいらしい小さな脚あしが現われ

てきます。ほんとにキスをしてやりたいような足です。そしてわたしは、ほんとうにその足にキスをしてやるのです！」と、月が言いました。

「今夜わたしは、どうしてもこのことを話さずにはいられません。今夜わたしは、一つの窓をのぞきこみました。向い側に家がないので、その窓にはカーテンがおろしてありませんでした。そこには子供たちが、姉妹しまいや兄弟たちがみんな集まっていますのが見えました。その中にひとりの小さい女の子がいました。この子はやつと四つになつたばかりでしたが、それでもほかの子供たちと同じように、『主の祈りいの』をとなえることができました。そのため母親は、毎晩その子の寢床ねどこのそばにすわって、その子が『主の祈り』

をとなえるのを聞いてやるのでした。そのあとで、その子はキスをしてもらうのです。そして母親はその子が眠りつくまで、そばにいてやります。でも小さい眼は閉じたかとおもうと、すぐに眠ってしまいます。

今夜は、上のふたりの子がすこしあばれていました。ひとりはい長い白い寝巻を着て、片足でピョンピョン跳ねまわりました。もうひとり、ほかの子供たちの着物をみんな自分のからだに巻きつけて、椅子の上に立ちあがり、ぼくは活人画だぞ、みんなであててみる、と言いました。三番目と四番目の子は、おもちゃをきちんと引出しの中へ入れました。もつともこれは、そうしなくてはいけないことですけども。母親はいちばん小さい子の寝床のそ

ばにすわって、いまこの小さい子が『主の祈り』をとなえるから、みんな静かになさい、と言いました。

わたしはランプごしにのぞきこんでいました」と、月が言いました。「四つになる女の子は寢床の中で、白いきれいなシーツの中に寝ていました。そして小さい両手を合せて、たいそうまじめくさった顔をしていました。いましも『主の祈り』を声こわだか高になえているところだったのです。

『あら、それは何なの？』母親はこう言って、お祈りの途とちゆう中ちゆうでさえぎりました。『おまえはきょうもわれらに日々のパンを与えあたたまえと言つてから、ほかにも何か言つたのね。お母さんにはよく聞えなかつたけど、それは何？ お母さんに言つてごらんなさ

い！』——すると、女の子は黙だまったまま、困りきった顔をして母親を見ていました。

『きょうもわれらに日々のパンを与えたまえと言ったあとで、おまえはなんて言ったの？』

『お母さん、怒おこらないでね』と、小さな女の子は言いました。

『あたし、お祈りしたのよ。パンにバターもたくさんつけてくださいまし、ってね！』

解説

矢崎源九郎

アンデルセンといえは、おそらくその名を知らない者はないといつてもよいであろう。ことに童話詩人としての彼のかれ名前は、われわれにとってはなつかしい響ひびきを持っているのである。しかし彼は単に童話を書いたばかりではない。小説に戯ぎ曲きよくに詩に旅行記に、じつに多方面にわたって筆をふるっている。なかんづく、イタリアの美しい自然を背景として美少年アントーニオと歌うた姫ひめ

アヌンチアータとの悲恋ひれんを描いたえが『即興詩人そつきようしじん』のごときは忘れがたい作品の一つであるといえよう。

ハンス・クリスチャン・アンデルセン Hans Christian Andersen

——われわれはいつのまにかアンデルセンと呼びなれているが、これはわが国独特の呼び方であろう。いつたいに外国の発音をカナで書き表わすことは不可能であるが、デンマーク流の発音はアナスン、アネルセンに近い——は一八〇五年四月二日に豊かな伝説と古い民謡みんようとに恵まれてめぐいるデンマークのオーデンセという町に生れた。生れ故郷のオーデンセは、ブナの木きの林のあいだに麦やウマゴヤシの畑はたけがかぎりなく続いているフーン島という美しい緑の島にあった。父は貧しい靴職人くつであったが、折まにふれて

幼いアンデルセンにおとぎばなしや物語などを読んで聞かせた。文学への興味はこのころの父の感化によつて芽生めえたといつてもよい。母は働く一方の女で学問はなかつたが、深い信仰心しんこうしんを持つていた。このふたりのもとに、幼いころはともかくも幸せしあわな日々を送ることができたのである。しかし、十一歳さいのときに父を失うに及およんで、この幸福の夢ゆめもはかなく消え去つてしまった。母は仕立屋の職人しかりんにしたいという希望を持つていたが、アンデルセンみずからは舞台ぶたいに立つことを望んで、十四歳のときただひとり首都のコペンハーゲンをめざして旅立つた。このときから彼にとつて新しい世界が開かれるとともに、茨いばらの道がはじまつたのである。すなわち都に出るには出たものの、何もかもが彼の希望に反して

しまった。俳優はいゆうとして舞台に立つこともかなえられず、持って生れた美声を頼たよりに志望した声楽家にもなることができないままに、いくどか絶望のどん底におちいった。しかし幸いなことにも、一生の恩人であるコリンに見いだされたのはこのような失意のときであつた。それまでは学校教育もろくに受けておらず、物を書くのにも綴つづりがまちがいだらけというありさまであつたが、このコリンの助力のおかげで学校へも行けるようになったのである。

アンデルセンは一生のあいだ旅から旅へとさすらつて歩いた。旅こそは彼から切り離はなすことのできないものであつた。一八三一年に初めて国外への旅行を行い、つづいて一八三三年にはドイツ、フランスをへてイタリアへの旅にのぼつた。このときの旅行のあ

いだに、その印象をもととして書いたのが『即興詩人 Improvisatoren』(一八三五年)であつて、この作によつて初めて彼の名は国の内外に認められるようになった。『ただのバイオリン弾き *Kun en Spilmand*』とか、(こつ)に訳出した『絵のない絵本 *Billedbogen Billeder*』や、『スウェーデンにて *I Sverige*』、『わが生 *Min Livshistorie*』の物語 *Mit Livs Eventyr*』をはじめ、彼のほとんどすべての作品はこのとき以後のものである。童話についても同様、『即興詩人』が出版されてから二、三カ月後にはじめて第一集が出、それから一八七五年八月四日に永眠するまでに百五、六十にも及ぶ多数の童話が書かれたのである。

『絵のない絵本』は、一八三九年から四〇年ごろを中心にアンデ

ルセンの創作意欲の最も盛さかんなどきに書かれたものである。初めて本になったのは一八三九年十二月二十日で、（表紙の日付は一八四〇年となっている）そのときはわずかに二十夜をふくむごく小さい本であった。この二十夜のうち五編はすでに一八三六年に文学誌『イリス（虹にじの女神めがみ）』第二号上に発表されている。たとえば同誌に掲載けいさいされている『フランス国の玉座の上の貧しい男子』というのは第五夜の物語である。一八四〇年にはさらに数夜が発表されたが、一八四四年の第二版においてようやく三十一夜を包ほう括かつするにいたった。第三十二夜と第三十三夜は一八四八年に初めて公おおにおにされたものである。したがって一冊のまとまった本として現在のように三十三夜全部を含んだのは、一八五四年に発

行された第三版が最初である。初版から三版までに多くの歳月が流れているのは、この本がデンマークにおいてはあまり問題にされなかったためであろう。つまり、この本も『即興詩人』の場合と同様、本国におけるよりもむしろドイツや英国などにおいて評判となったのである。

『絵のない絵本』はこのように小さいにもかかわらず、きわめて多彩な素材たさいを含んでいる。その大部分がアンデルセンみずからの体験や印象にもとづいていることはいうまでもない。すなわち、第五夜は一八三三年のパリ滞たいざい在中の体験から、第六夜は一八三七年のスウェーデン旅行の印象をもととして書かれたものである。第十五夜のリユーネブルク、第二十五夜のフランクフルトには一

八三三、四年に訪^{おとず}れている。一八三三年から三四年にかけてのイタリア旅行の印象は第十二夜、第十八夜、第二十夜などにあらわれている。なかでも、暗い北^{ほくおう}欧生れのアンデルセンがあこがれてやまなかつた明るい南の国イタリアは、この本においても最も多く描^{えが}かれているのである。

また一方においては空想の翼^{つばさ}に乗って、遠くインドをはじめ、グリーンランドやアフリカ、中国にまでも思いを馳^はせている。それらは第一夜、第九夜、第二十一夜、第二十七夜となつてあらわれている。そのほか子供についての話は六つほどあるが、それを描くのにあたたかい優^{やさ}しい感情をもつて、しかも明るいユーモアを忘れていないところはいかにも童話詩人らしい。さらにまた諧^か

いぎやく
 諺にあふれたもの、あるいは苦惱くのおうにみちたものもあり、人生の一断面のスケッチもある。小さい本ながら、まことに盛りもりだくさんである。しかもこの本は、月が絵かきに物語る話という形を取つてはいるものの、その特とくちよう徴とするとところは絵画の素材をあた与えるための、眼めまぐるしいばかりの場面の展開にあるのではない。一つ一つの短い物語の底に流れる、絵を絶ろーまんてきかおした浪漫的香りも高い詩情こそその生命なのである。

ほんやく
 翻訳のテキストとしてはコペンハーゲンの Gyldendal 書店が

ら一九四三年に発行されている H.C. Andersen's Romaner og Rejseeskildringer (小説、旅行記集) の第四巻に収められている Billedbog

uden Billeder を用いた。ただ、年少の読者にも読みやすいように、改行を多くしたことを一言おことわりしておく。

(一九五二年六月二十六日)

青空文庫情報

底本：「絵のない絵本」新潮文庫、新潮社

1952（昭和27）年8月15日発行

1987（昭和62）年12月5日66刷改版

2005（平成17）年8月10日99刷

※底本巻末の注は省略しました。ただし、第一夜「梵天王」《ぼんてんおう》、第五夜「堡塁」《ほうるい》、第三十夜「桝」《たるぎ》の三語のルビは巻末注より本文に追加しました。

入力…sogo

校正…諸富千英子

2018年3月26日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

絵のない絵本

BILLEDBOG UDEN BILLEDER

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫
著者 絵のない絵本
URL <http://www.aozora.gr.jp/>
E-Mail info@aozora.gr.jp
作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU
URL <http://aozora.xisang.top/>
BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>